

麗澤教育

第13号

平成19年(2007)4月

特集：麗澤大学の専門ゼミ



『麗澤教育』発刊の趣旨

本誌は、麗澤大学における教育、特に建学の精神を中心とした人間教育について、教職員や学生、部活動の指導者、保護者、卒業生などが、お互いに議論を深め、かつ、それぞれの実践や現状を報告するためのメディアです。平成7年より毎年1回発行しています。

麗澤教育 第十三号 〈目 次〉

〈フォト・アルバム〉この一年①

〈特別寄稿〉

学生に贈る「教養のすすめ」

梅田 博之 6

〈特集〉麗澤大学の専門ゼミ

① 共に学ぶ場としてのアメリカ映画研究

日影 尚之 13

大城 亜美、永谷 季恵、三家本教道、柳沢 希美

山川 和彦 12

② オーストリア研究—ゼミの形態を模索して—

梅田 博之 12

加古 一平、近藤 周子

松田 徹 12

③ ゼミをふりかえって

野林 靖彦 23

④ 意境探求

寺本 佳苗、竹内 勇人、山賀 康弘 28

松永 幸香、佐藤 紗子、金 英実

和博 28

⑤ わがゼミ生の感想記

寺本 佳苗、竹内 勇人、山賀 康弘 34

白田 貴之、清水 祐香、禪定 康代

(6) 座談会「土井ゼミの秘密」

土井 正

(7) 都市経済学を通じて学ぶこと

佐藤 仁志

44

林 静芳、三宅 貴子

貴子

39

〈フォト・アルバム〉この一年②

〈麗大の今〉

1 大学院言語教育研究科に英語教育専攻が新設! 渡邊 信 51

2 速水名譽教授資料本学へサンキュー、フランスシコ・ザビエル・サンキュー、アキラ・ハヤミー 黒須 里美 56

3 E.L o u n g eで気軽にプチ留学してみませんか 谷口 貴美 61

4 キャンパスライフを支援する——「学生相談センター」の役割と現状—— 森川 正大 66

〈麗大生の今〉

1 剣道部体制の見直し 小川 拓郎 71

2 陸上競技を通じて学び得るもの 清水 健 71

74 71

3 指定強化部に選ばれて

齊藤 雄一

4 課外活動に所属する意味

長嶋 佑佳

〈卒業生の今〉

日本語教師として成長する方法

石綿由美子

多様な顔を持つ魅力のベルリン

見目 涼子

〈温故知新・その五〉

校門から營門へ

池田 裕

96

91 87

83 79



麗澤大学生涯教育プラザ落成・大学院開設10周年記念式典 (2006・4・26)



車いすテニスの国枝慎吾選手・斎田悟司選手ペアがウィンブルドンで初優勝 (2006・7・9)



“麗澤家族”一堂に集い、恒例の野外昼食会。
(2006・5・10)



台北市で開かれた別科開設30周年記念の集い
(2006・8・26)



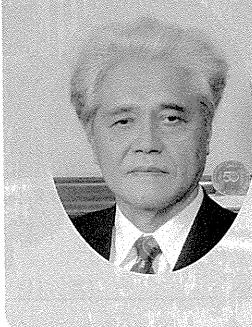
『國家の品格』の著者、藤原正彦氏が特別講演
(2006・6・17)



羅・駐日韓国大使(左側)が特別講演された第3回日韓人文社会科学学術会議 (2006・8・30)

学生に贈る「教養のすすめ」

麗澤大学前学長・名誉教授 梅田 博之



一・大学生活四年間がもつ意味

皆さんは麗澤大学の学生として四年間を過ごしつつあります。すでに、短い人は一年、上級生は四年近くの大学生活をおくつてきているわけですが、大学生活をおくる意味をどのようにお考えでしょうか。

ここで、大学生活というものが持つ意味を一度きちんと考えておくことは決して意味のないことではないと思います。

いうことの意味は、高校を卒業する本人がこれから人生で重要な時期、人間形成の大切な時期である四年間をどこでどう過ごすかを決めるという人生における重大な決定を行うことだ、本学は責任を持つてこれにきちんと対応するといつも申し上げてきました。

大学の四年間は、人間形成にとってとても重要なときだと思います。自分が将来何をやりたいのか、社会の中での自分の役割やあり方について考え、どんな分野でどのように社会の一翼を担つていきたいかを決め、そのための基礎となる知識や方法論を学ぶ麗澤大学では、年に何度か高校生と父母の方々に対して大学説明会という行事を行っています。私は、その時にいつも高校生や父母の方々に、大学受験と

ぶ、一生の時間の中で特に重要な時期です。ですから、当然のことながら、何よりもまず学業に励まなければなりません。また、今後の人生での活躍に耐えうる丈夫な体を作るために規則正しい生活と運動を行つて健全な健康状態を維持する努力も大切です。

同時に、高校時代より行動の範囲や交友関係が広がり、師弟や友人という人生で大事な人間関係を構築する時期でもあります。交友関係は海外留学や留学生の受け入れでいまや国際的に広がっています。異なる文化を担い異なる言語を話す友人はとても刺激的だと思います。大学時代によき師、よき友に恵まれれば、その後の人生は温かみのある豊かなものとなるに違ひありません。特に、共通の目標をめざして切磋琢磨する部やサークルなどの課外活動の場は生涯にわたつて心を許し合える親友を得られる場でもあります。

また、友人をたくさん持つということも人生を幅と厚みのあるものとしてくれます。ひとりの友人が結び目になつて、そこから新しい人間関係が広がります。

ていきます。また、社会に出て知り合つた人が共通の友人をもつてていることが分かると、親しさが深まるというようなことはよくあることです。

二・教養を高める

大学生活でもう一つ大切なことは、向後の専門知識・技能の習得と活用、その他すべての知的活動の基盤となる教養・知性・知力を身に付けることです。十代後半から二十代前半にかけてのこの時期に、知識を学び芸術に接する楽しさを知ると同時に、知識・知性を涵養（養い育てる）するための知的訓練を行うことが必要です。大学時代はまさにこのような知的好奇心を満たし、知の力を育てる絶好な環境にあり、これによつて高度な水準の教養が身に付いていきます。その際、高い倫理性を持ち、物事を論理的に考え、的確な判断を下すことができる資質を育てることが必要です。

教養とは、教養とは、一個の独立した人間が持つているべきだと考えられる、いろいろな分野にわたる一定レベルの知識や常識のことと、その知識の修

得を基礎として知の力、すなわち物事に対する理解力や創造力が涵養されるとともに品位や人格も自ずから高められることをいいます。

ただ、今日のように多様な価値観が共存する多言語多文化の国際化社会の中では異なる文化を理解し、異なる価値観や世界観を認め合うことが必要であり、他方、グローバル化の進んだ社会では問題を世界的な視点で捉え、世界的な基準で律する必要にも迫られています。

もともと、教養の涵養においても古今東西の古典や外国文学に接するなど、世界的な視点と多文化理解がともに重要な意味を持つていますが、価値観の多様化した現代にあっては単に時代や国・地域の違いだけでなく、ジェンダー・世代など位相の違い等も含めて、自己とは異なる他者の存在を認め、その背後に異なる思想や伝統・文化を理解することが重要です。そして他者との違いを認識する過程で自分のあり方を考え、自己を確立するとともに、他者を理解し尊重しながらともに生きるという互敬

の精神を身につけることが現代の教養の重要な要諦であると思います。

勿論、世界化、国際化、情報化が進み、科学技術が進んだ現代ですから、外国語のコミュニケーション能力、情報リテラシー、科学リテラシーを向上させることが必要なのは言うまでもありません。

どのように教養を身に付けるか 実際にどのように教養を培っていくかは人それぞれですが、歴史遺産・文化遺産に接して歴史の教訓や先人の残した業績に学ぶ、先人の観察の結晶である古典に学ぶ、先覚者の行実に学ぶ、芸術を楽しみ美意識と感性を養う、自然を観察してその摂理を知る、スポーツを通じて心身を鍛えフェアプレーの精神を学ぶ、職業経験を積んで働くことの意味を考える、ボランティア活動を通して奉仕の心を培うなどが考えられ、さらにこれらの諸活動を通じて、課題に孜々として取り組む心を育て、調和と協力の精神を養うことが期待されます。ですから日常のキャンパスの中で、或いは課外活動の場でできることが多いはずです。

廣池千九郎博士に学ぶ 教養を培うことによつて
自ずと品位や人格が高められるものですが、社会に
貢献する人材になるためには高い倫理性を持たなけ
ればなりません。本学は学祖 廣池千九郎博士のお考
えを戴し「モラロジーに基づく知徳一体の教育」を
理念として、品性教育・人格教育に重点を置いた教
育を行っています。特に、習得した専門的な知識や
技能を、社会生活において有効に活用しうる豊かな
道徳性を備えた人材を育成するために『道徳科学』
を全学一年次必修科目としています。さらに、私た
ち教職員はそれぞれの分野と立場で理念を具現する
ための目的・目標を定め、その達成に努めています。
学生諸君は、授業の内外、大学生活のあらゆる場で、
博士のお教えをきちんと学び、理念が目指すものが
何であるかを常に考え、それぞれの立場で自らそれ
を達成するように努力しなければなりません。

昨夏、本学で開いた日韓人文社会科学学術会議に
日韓の碩学が集まり、羅鍾一大使はソウル大学を卒業し、
演をされました。羅鍾一大使はソウル大学を卒業し、

ケンブリッジ大学で政治学博士を取り、ケンブリッ
ジ大学、スタンフォード大学、ソルボンヌ大学等の
教授を歴任した国際政治専攻の学者ですが、講演に
先立つて廣池理事長のご案内で記念館を参観し、そ
の感想を講演の冒頭で「短い時間であつたが、とて
も感動的な体験だつた。社会のために自分の利益は
全然考えず、あのように立派な志を残し、業績を残
した方の存在が驚きであるとともにとても感動的で
あつた。その立派な志が、狭い範囲に留まらず、社
会的に広い次元で理解され実現されなければならな
い」と述べました。何の予備知識もなく初めて本学
を訪れ、博士の思想と行実に接した大使がこのよう
に感動し称賛しておられたことに、私は深い感銘を
受けました。私たちはもつと博士のお教えを学ぶ必
要があります。博士のお仕事は多岐にわたり、数多
くの業績を残しておられます。言語学を専攻する
者として言語に関するもの二つについて、ここで私
なりの思いを述べてみます。

れた専門技能・知識の尊重に関連して「職業活動に直接役立つ」という実践的な観点ならびに人間を偏狭な知識や独善的な文化観から解放する観点から、外國語を学ぶことが極めて有効である」との博士のお考えが示されています。外国語学習に関する、この二つの観点はともに重要ですが、特に第二の観点は「事象の捉え方は言語により異なり、人間の思考や行動はその用いる言語によって規定される」というサピア・ウォーフの言語相対論に近いお考えを根底にお持ちのようで、まさに博士の先見性を示すものと言ふことができます。言語は、人間の外界に対する認識と密接な関係があり、人間は外界の事象を言語によって概念化しています。それ故、外国語の学習はその言語の話し手の思考方式を理解するとともに、自分を客觀化し相對的な考え方を養うのに有効です。

翻つて、国語は私たち日本人の論理的思考の基礎であり、すべての知的活動・言語表現活動の基盤として日本人のアイデンティティーに関わるものですから、国語の力を高めることも非常に重要です。

吏讀研究 次に、ご著書『支那文典』巻末に「朝鮮吏讀文の研究」という論文があります。吏讀(りとう)とは漢文に漢字の音訓を借りて文法的要素を表記したもので、わが国の祝詞や宣命の送り字と似ています。博士は、朝鮮の法律書に吏讀混じりの漢文で書かれたものがあるために吏讀を研究されたのですが、ある目的のために必要な課題はすべて徹底的に究明し解決していくという弛まぬ努力をされる博士のご態度に感銘を受けると同時に、このご研究は朝鮮語学史上、前間恭作氏や金澤庄三郎博士らの専門家に先行する、近代以後最初の吏讀研究の業績として高く評価されるべきものです。

修養的教養 さて、教養を形成する上では礼儀作法も重要で、「修養的教養」といわれています。集団生活のなかでの決まりやエチケットをきちんと守り、挨拶を励行し、適切な言葉遣いや敬語を選んで使うことが必要です。本学は、来年度の事業計画の中に「充実した学生生活が送れるように学生を支援する」ための一つとして「キャンパス内で挨拶をすること

を提倡し推進する」、「マナーの向上を呼びかけ“思いやりキヤンペイン”を推進する」としました。社会に生きる人間として礼儀・作法を身に付けることが大切であることを強調しておきたいと思います。

教養と社会 教養は、このように個人の中で培われ、個人の人格形成にとってたいへん重要ですが、その人が生きる社会の重要な基盤にもなります。一人一人が豊かな教養を持ち、生涯を通じて新しい知識の獲得に努め、社会の一員としての責任を果たせば、結果として知性豊かで創造力のある社会が構築されることになります。教養を高めることは、個人の人格形成のために重要であるだけでなく、「品格ある知識基盤社会^注」の実現を可能にするものと思います。

(注・知識や情報が社会を動かす原動力となるような社会[knowledge-based society])



〈特集〉麗澤大学の専門ゼミ

専門ゼミの紹介は既に本誌第八号で特集として取り上げましたが、好評につき第二弾として、今回は、外国語学部から四コース、国際経済学部から三コースのゼミを紹介いたします。それぞれのゼミの紹介は担当教員のゼミ教育にかける期待や工夫と、それに対する参加学生の感想から構成されています。

特に学生の感想を通してうかがうことのできるゼミの意義は、本学の教育の特色を端的に示すものとして貴重な内容であると考えられます。

たとえば、「社会人になった今、ゼミは最も貴重な時間であった」という卒業生の手記から、ゼミ活動がもつとも大学生らしさを味わう時間であり、卒業後大学とのかかわりを持つ大切な場であることを知ることができました。さらに教員の専門家としての学識に触ることにより、単に知識のみならず、その人格を通して学問の面白さ、研究の楽しさを味わい、それは人生観の根底にかかるものであったとも述べています。

またゼミ生が一番頭を悩ませるのは卒業論文であり、最も不安に感じているのは論文の書き方です。この最

も悩める問題に対し、テーマの絞り方、調査の方法、構成など基礎的な問題について長い時間をかけて丁寧に指導するという教員の姿勢から、ゼミでの教育が人としての基礎的な能力を開発する場でもあることを知ることができます。さらに対話の形でゼミを紹介してくださった記事を拝読して、その一問一答は教員と学生との交流の仕方を示唆するものであり、「自分への挑戦」をモットーとする教員の意思が伝わっていく経緯を知ることができます。

これらの手記を拝読して、「ゼミは人との出会いの場」、「人間関係を築かせたゼミ」、「人生を変えたゼミ」という学生のことばが印象に残りました。ゼミでの経験は学生諸君の人生の最も根底の部分にかかるものであり、教員にとっても教育の理想を実現することを再確認することができ、それは建学の精神である「知徳一体」を目指す「師弟同学」の場として、存分に機能していることを確信いたしました。ご多用の中を快く寄稿してくださいました諸先生、並びに学生諸君に対して心より感謝申しあげます。

（出版委員会委員長 井出 元）

共に学ぶ場としてのアメリカ映画研究

外国语学部 準教授 日影尚之



「専門コース・ゼミナール」では特にそうですが、学生と一緒に作っていく側面が多くあります。ですから、平成十八年度で八年目になる当ゼミでは、（アメリカ）映画について研究するといつても、クラスの進め方や具体的に扱う内容は、（主に三年生の）メンバーやその人数を見ながら、毎年少しづつ変えます。もう一つは、学生自身がなるべく自主的に、自覚をもって、

観てきて参加することで、重要な観点を指摘できるでしょう。「貢献」の仕方には、様々ありますが、地道な努力が大切です。また、様々な制約下で作られた日本語字幕に無批判に頼りすぎないことも必要です。

平成十八年度の場合は、学期ごとに、〈テーマ〉を設定し、発表してもらいました。一学期の〈宗教〉では、例えば、宗教または宗派対立を扱う映画『夏休みのレモネード』(Stolen Summer, 二〇〇二年、米)や『ボンベイ』(Bombay, 一九九五年、インド)などで、対立の狭間に（純粹な）“子ども”を配置する手法が印象に残り表（報告）は、有益なディスカッションの呼び水にな



映画研究の魅力

英語学科四年 大城 亜美

日影ゼミでは学期ごとに定めたテーマに沿って授業が展開されます。活動計画の前半では、クラス全体で

ました。やはり子どもを主要人物に据えた『刑事ジョン・ブック 目撃者』(Witness, 一九八五年、米)はアーミッシュの人たちの生活を扱いながらも、「西部劇」を思い起こさせる作品でした。二学期は、クローン人間や人体実験など生命(医療)〈倫理〉を扱う映画『アイランド』(The Island, 二〇〇五年、米)や『ボディ・バックス』(Extreme Measures, 一九九六年、米)、また、司法(陪審員)の下す「正義」を扱う『評決のとき』(A Time to Kill, 一九九六年、米)や『ニューオーリンズ・トライアル』(Runaway Jury, 二〇〇三年、米)などで議論が盛り上りました。「学問」的には初步的な段階ですが、豊かな「学び」の場になるよう頑つてやっています。「準備に追われる」のは学生のみならず、私の方です。

トライアル』(Runaway Jury, 二〇〇三年、米)などで議論が盛り上りました。「学問」的には初步的な段階ですが、豊かな「学び」の場になるよう頑つてやっています。「準備に追われる」のは学生のみならず、私の方です。

『刑事ジョン・ブック 目撃者』(Witness, 一九八五年、米)はアーミッシュの人たちの生活を扱いながらも、「西部劇」を思い起こさせる作品でした。二学期は、クローン人間や人体実験など生命(医療)〈倫理〉を扱う映画『アイランド』(The Island, 二〇〇五年、米)や『ボディ・バックス』(Extreme Measures, 一九九六年、米)、また、司法(陪審員)の下す「正義」を扱う『評決のとき』(A Time to Kill, 一九九六年、米)や『ニューオーリンズ・

映画研究を行っていきます。後半では、テーマに適した映画を各自で選び、それについての個人発表及びクラス全体でのディスカッションが行われます。

私たちが前期に取り組んできたテーマは「宗教」でした。このテーマに沿って私たちは映画選びから始め、その映画がどのようにテーマと絡み合っているのかを各自で研究し、発表準備を進めました。ディスカッションでは発表者を中心に作品に対する見解を言い合い、皆で考えを深めていくことができました。

映画研究を目的とするこのゼミでは、映画を皮切りに社会的・文化的背景を学ぶことができます。一本の映画から得られる知識は十二分にあるということを私は知りました。例えば、映画と社会の相互関係です。映画は社会と決して無縁ではありません。時代の風潮が作品を生み出すきっかけとなり、風潮が生み出した作品は社会に大きな影響を与えるのです。

映画研究をしていく中で一番の魅力は、映画に込められたメッセージを様々なシーンから汲み取っていくところにあるのだと思います。後期のテーマは「正義

と倫理」です。前期の反省を踏まえた上で、更に内容の濃い発表が行われています。今学期は今まで以上に学生を主体とした活動が展開されています。準備に追われることもありますが、その分、成し遂げた時の達成感は非常に心地よいものです。

映画研究の意義を求めて

英語学科四年 永谷 季恵



私はこのゼミを通じて映画に込められた主張やメタファーについて考える機会が多くなった。例えば、ジエームズ・キャメロン監督『タイタニック』（一九九七）のワンシーンを観てみたい。上流階級の女性が身につけるコルセットを母親が娘に締め付けるシーンは、当時の女性の束縛を象徴しているかのようだ。このようなメタファーを発見すると文化的要素に触れている気持ちになれる。ゼミではメタファー

ーや文化背景について活発な議論が交わされ、様々な視

点からの気づきを共有することができる。特にゼミ生たちの作品に対する熱意に、はつとさせられる瞬間があり、とても良い刺激となっている。

また、映画はその時代の思想や社会情勢を映し出す鏡である。歴代のアカデミー賞受賞作を比較するとアメリカの国内情勢の安定時には社会派作品が、そしてやや不安定な時期にはファンタジーやノースタルジーを想わせる映画が脚光を浴びる。つまり、ひとつひとつ台詞や場面がメッセージを反映していることが多いのである。私はそうした影響を受けた過程で制作された映画を、主觀と客觀の両側面から繙くことを心がけている。確かに映画に込められたメッセージを正面から受け取ることも重要だが、映画は人間により意図的に構成されたものである。ゆえに時に批判的な視点を持つことも鑑賞をより充実したものにしてくれる。私は娯楽的要素を含みながらも、文学作品としての側面を尊重した映画研究に多様な意義を感じている。

映画で「世界」を学ぶ



英語学科四年 三家本教道

日影先生のゼミに入つて早八ヶ月が経とうとしている(一〇〇六年十一月現在)。毎回のように素晴らしい発表や意見を述べるゼミの仲間に、自分の薄識無知を思い知らされる濃い授業である。この授業は映画という媒体を使い、英語圏の文化について学ぶというのが主旨で、ハリウッド映画が中心となる。今やハリウッド映画は立派なビジネスであり、その収入は全世界で年間約八〇億ドル。観客動員数でも年間一五億人近い人々が映画館に足を運んでいるという。更に、全世界で公開されるため、世界中の人々に政治的な面で大きな影響力をを持つことも多い。

マイケル・ムーア監督の『華氏9/11』の海賊版がキーバ国内のテレビ放送で公開され、国民が歓喜していた様子は記憶に新しい。最近、ハリウッドで、流行っている“昔の映画や他国の映画のリメイクにも、そのエロッパの他民族に対する行為を婉曲的に批判したこの作品が、一九五三年、ハリウッドで初めて映画化された時は冷戦下の核の恐怖を火星人に置き換えたものとなり、二〇〇六年のスピルバーグ監督版では二〇〇一年九月一日の同時多発テロをこれまで婉曲的に描いたものとなつた(『宇宙戦争』スピルバーグ監督のインタビュー)。

この様に国やジャンルを問わず「映画」には様々な要素が凝縮されており、その背後にあるものを学ぶということは今の我々の世界を学ぶということに他ならない。そこから様々な諸問題に対する答えが見つけられないにしても、少なくともそれらについて考えるきっかけになればよい。日影先生のゼミの趣旨に沿って学ぶことは、未来の日本・世界を担う私たちにとって、大きな意味があると信じている。

大学生活の集大成



平成十九年三月英語学科卒業 柳沢 希美

ゼミを決めた時期から約一年。今は卒業論文を書き進めている。書いていると、卒業論文は、限られたゼミの時間の中で学んだことを活かすというより、自分が研究したい内容に対しても、自然と活きてくるものだと気付く。

私は日影先生のゼミに所属している。アメリカ映画を研究するゼミである。もともと映画は好きであったが映画館に通うほどではなく、筋書きばかりを追つて映画を観ていたが、ゼミでの研究は当然違った。表情や仕草から意思を読み取り、直接描かれていない背景などを調べることで映画のテーマをより明確に捉えていく。何本かの映画を研究し、また他のメンバーのプレゼンを見てそれぞれの映画の捉え方の違いに気付く。ストーリーを追うだけではわからない映画の面白さを知ることが出来た。

卒業論文はディズニー文化について書いている。多くの名作を生み出した映画会社としてのディズニー社と、映画以上の力を持つエンターテイメント企業体としてのディズニー社のあり方に興味を持ったからである。多くのディズニー映画を何度も見返したが、やはり背景を調べてから観るとでは全然違う。作者の生き立ちや価値観が見事に映画に反映しているのがとても面白い。その中で、自分の見解などを織り交ぜながら書き進めていく。

卒業論文の提出が近づき、同時に大学生活の終わりも近づいている。卒業論文は大学生活で学んだことの集大成だと思うので、大事に丁寧に書き進めていきたいたい。ただ、ゼミで学んだことはここで活かして終わりではない。これから生きていく上でも自分の力として活かしていきたいと思う。

オーストリア研究 —ゼミの形態を模索して—

外国语学部 准教授 山川和彦



一、萌芽期

本学に着任してから四年、私のゼミはまだ発展途上にある。ドイツ語学科に所属しているとはいえ、本来の専門領域は、国でいうとイタリアで、かつてオーストリアから割譲された南チロルという地域の社会事情や言語政策である。これをゼミのテーマとして取り上げるのは、かなり「マニアック」に思えた。なにせ南チロルの研究者は日本に片手もいないのであるから。かといって、二〇〇〇年頃から関心を持ち始めたクリスマス市研究を学生と行うには、まだ充分情報を持ち合わせていなかつたので、結局のところ、オーストリア

ア研究という看板に落ち着いた。着任早々参加した谷川のオリエンテーション・キャンプに向かうバスの中で、最初のゼミ生が決まった。二泊三日のキャンプ中で、私のゼミに参加したいという学生が次々と現れ、その後九月に留学から帰国した学生を含めて定員いっぽいの十五人のゼミ生を引き受けることになった。当時、まず課題に出したのが、新聞記事の収集である。毎週新聞に掲載されるドイツ語圏の記事をコピーしてきて、いわば新聞のダイジェスト版を作るのである。結構大変な作業のようであつたが、あの作業がためになつたという話を後々聞かされたこともある。週一回のゼミ

では、オーストリアについてとにかく調べ発表してもらい、大学祭にも参加した。オリエンテーション・キャンプの上級生スタッフを申し出るメンバーである。

大学祭参加は、暗黙の了解だったのかもしれない。

実は、この一期生の上に、自由研究の指導を引き受けた四年生三人がいた。幾分きついことを要求したかもしれないが、よい卒業研究を残すことができた。まだ学内の仕事も少なかつたため、この三名とはよく話した。

続く二年目も、十二名のゼミ生を迎えることになった。彼らにも一期生同様の作業を求め、オーストリアに関する見聞を深めてもらつた。大学祭にも参加したが、一年目の焼き直しにならないように、苦労したようである。二期生は、卒論指導のみを受けたメンバーが途中で加わり、結果として十五名の門下生を送り出した。

卒論のテーマは千差万別である。パン、魚、チョコレート、ビールなどの食文化、蒸気機関車やドイツ車、紋章、建築と住環境、環境、クリスマス市やオクトー

バーフエスト、玩具、乗馬、オペラ、第九、ジャポニズムなど、こちらも随分と勉強させられた。

平成十六年三月ドイツ語学科卒業 加古 一平



く学ぶゼミ、というのがこの山川ゼミの一番の魅力だと私は感じている。ゼミで、特に思い出深かつたことは学園祭での展示である。学園祭が行われた当時、山川ゼミはその年にできたばかりのゼミで、展示での経験もなく、すべてが新しいものだった。学園祭参加が決定し、それらを任せられた当時私達三年生は、緊張の中お互いの意見を出し合い、協力し、自分達の力で展示を終えた。そして私たちの展示が麗澤会賞を受賞し、みんなで喜びを分かち合うことができた。受賞もさることながら、大学祭を通じてゼミ生同士がそれまで以上に仲を深めることができたのが、私にとってとても嬉しいことで、絶対に忘れるこの

ない思い出となつた。

またゼミの授業以外にも、飲み会やバー・バーキューなどのイベントがあり、OB・OGである私たちも一緒に参加し、現役と親睦を深めることができるもの魅力の一つだ。

二、展開期

丸二年が過ぎ、私と一緒に入学してきたメンバーがゼミに参加するようになつた。学生事情もだいぶわかつてきただので、ゼミの志向を少し変えてみると日本語で入手できる情報が限られていることがある。それは、オーストリアに関していえば、一般書物は芸術文化やウイーンに関するものに集中し、その他のことを探るうとすると、ネットで検索するにせよドイツ語の資料が必要となる。そこで少しづつではあるが、ドイツ語の文献や学術論文を取り上げてみた。この作業の延長線上に意図したことは、オリジナリティの高い卒業研究をすることである。学習期間は短いが、身につけて

きたドイツ語力を駆使すれば、日本語の資料にはない、「本邦初」の論文ができる。これはすなわち、彼らの研究が、後輩や他大学の学生たちの参考文献になることという野望である。「資料がない」なら「自分で資料を作れ」ということで、手探りながらもアンケートやインタビューを行つた学生も多い。大学祭にも参加し、試行錯誤の末、三年目のオーストリアをプレゼンテーションすることができた。



平成十九年三月ドイツ語学科卒業 近藤 周子

山川ゼミでは、「論文を書く」という方法論的なことを、二年間徹底して学んでいる。

それは、日本語で書かれた論文を「読む」ことから始まつた。いくつかの論文を使って、基本的な論文の構造や書く際の注意点などを学ぶとともに、論文中に頻出する図表データを用いて、統計資料を読み取る練習もした。こうした論文を「読む」という行為は、自分が情報を集めた膨大な文献・資料に

目を通さなければならない時にも役立つのである。更に、三年生が始まる直前の春休みに行われた「読書会」では、研究室に少人数が集まってドイツ語の文献を順番に訳し、原文を読む力が鍛えられた。テーマによつて、なかなか日本語で書かれた文献が出てこない場合に、この時の経験が活かされている。

また、テーマ選び、テーマの絞り込み、問題提起、調査・研究手段の可能性、章の組み立て方などを、ディスカッションを通して学んだ。ここでは、私たちがまだゼミに入る前に出された「ドイツ人は本当にジャガイモを沢山食べるのか。この問いに解答を出すためには、どのような調査・研究が必要とされるか。それを考えてまとめなさい」という入門ゼミの選考課題が思い起こされた。「論文を書く」ためには、論理的な証拠を挙げなければならない。そのためにはどのような調査・研究が有効なのか…。「卒業論文」という巨大な論文を書くための準備が着々と行われている。

三、更なる可能性を求めて

第四期生として迎えたゼミ生は、全員留学中の学生で、ゼミを開始したのは九月である。概して三年も後半になると、「就職」のことが気掛かりになり、卒論は後回しという雰囲気がある、というのがこれまでの経験で感じたことである。かといって書き写しのような卒論はいやだという意識も持ち合わせている。考えてみれば二万字近い文章を書き上げることは、多くの学生にとって初めての経験である。何をどのように書いたらいいのか、それ以前にどのように問題提起をしたらいいのかもわからないのが、本当のところであろう。そこで、研究する基本的な「姿勢」について時間を割いてみたいと考えた。「急がば回れ」である。彼らに要求したゼミの到達目標は、「情報収集能力をつける」「分析能力をつける」そして「プレゼン能力をつける」ことである。このような基礎的作業の中で、卒業研究に結びつく課題を発見してくれるのを願つて、ゼミの内容に関しては、現役の学生に紹介してもらうことにしよう。

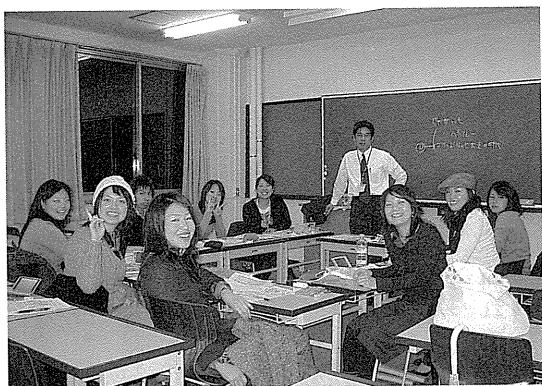
現役四年生によるゼミ紹介「コラージュ」

世界、日本ではどのようなことが起きているのか、日々の社会経済系のニュースを、まず学生一人一人がチェックする。ドイツやヨーロッパに関するトピックスを授業で取り上げ、先生が中心となり説明し、みんなで議論や考察しながら、知識や教養を深めている。時にはドイツ語の新聞を読むこともあるし、知らない事柄があると、誰かが調べてきて、次週に発表する。今までにビルと修道院の関係、ダイムラー・クライスラー社の歴史などの発表があった。

ゼミは、先生を囲んで「コ」の字型にすわり、その日のゼミ記録（プロトコル）を取る書記が任命される。そして一分間スピーチが始まる。「ワールド・ビジネス・サテライト」（テレビ東京のニュース番組）をみて、各自が興味を持ったテーマについて、四百字でまとめてそれを一分間でプレゼンするのである。この結果、何に対しても常に疑問を持ち、自分で調べてみるという態度が養わってきた。これは、今後社会に出たとき役に立つと思うし、ヨーロッパ圏だけではなく日本の

社会情報も吸収しようと意欲がわいてきた。

ゼミは少人数なので、とても話し合いやすく、全員が盛んに発言し、毎回アットホームな雰囲気である。ニュースから話題が逸れることもあって、親近感がわく雰囲気だ。



現四年生、とにかくにぎやかだ！

ゼミをふりかえつて

外国语学部 準教授 松田 徹



麗澤大学で、「中国歴史文化研究」のゼミを開いてから今年で十三年目になる。人數的に見ると麗澤大学のゼミの中では、かなり少人数のゼミだといってよいだろう。なにしろ、今まで在籍した学生総数が四十七名と五十に満たない数だから。少ない年度は新ゼミ生が一・二名ということもあった。

「なんでうちのゼミはこんなに人數が少ないんだろうね?」

雑談の折、ゼミ生に聞いたことがある。希望者が少ない中でわざわざ当ゼミを選択してくれたその学生は、「自分では、そう思わないけど歴史っていうとやっぱり当していて毎回小テストを行っていたせいかもしれない。嫌われているのか…とちょっとびり傷ついた。冗談はさておいて、やはり「歴史」という看板を掲げているためか、どうも取つきにくいという印象があるのかなとも思った。

昨今、高校における世界史未履修という問題が世間を騒がせている。およそ「歴史」というと、受験科目

として価値を見出さない限りは学習意欲が湧かない、というのが今の高校生の大半なのか、とニュースを見るたびに嘆息している。そして、歴史アレルギーの大学生が多い、というのが偽らざる現実である。例えば、

中国語学科に入学してくる学生であっても、中国近現代史に対する基礎知識がない。知識がないから興味も湧かない、興味がないから本も読まず知識も蓄えられない、という悪循環に陥っているように見える。

ゼミを担当する以前から、中国語学科一年次の入門科目として中国史の概説（科目名称は年次によつて変更あり）を担当しているが、初回の授業で、例えは、盧溝橋事件について質問すると、事件が勃発した場所や年代について正確な知識を持つている人は二割にも満たない（注1）。

知識がない、歴史アレルギーの学生ばかりだ、といつて嘆いてばかりもいられない。上記の一年次の担当科目でも出来るだけ興味を持つてもらえるよう工夫してきたつもりではある（注2）。ただ、せっかくほのかに抱いた興味を、さらに問題意識につなげそれをゼミでさらに深めさせる、というのは、言うは易く行うは難し、であつた。

要は、こちらの受け入れにも問題があつたのである。

私自身が史学科出身のせいか、変に意気込んで、史学科の學生に卒論を書かせるようなつもりになつていて。中国語を専攻し、留学を体験してきた学生たちが、何を一番求めているのか。それは現代の中国・中国人をどう見るか、ということに尽きる。学生が日常生活で（特に留学生活を通じて）関心をもつた事象を、研究テーマとして拾い上げ、膨らませてあげる。そんな、ある意味幅広さが必要だと気付いたのは、恥ずかしながらこの数年である。

興味を持った事柄、突飛な例では、中国のトイレや煙草など。それらに、歴史的な位置や意義を探る、こうした視点で書かれた卒論がこの何年か増えて来て、次第にゼミでの発表・討議も活発になりはじめている。

それでは、いま、どのようにゼミを進めているか、

三年次一学期には、まず、中国の歴史文化に関する概説的文献を輪読し、レジュメを作る。それと同時に図書館で文献検索方法などを具体的に身につける。わがゼミでは、必要に応じて何回か図書館三階のグループ学習室でゼミを行つてある。

ところで、毎年、図書館を利用して考えて貰われることがある。大部分の学生が、三年生になるまで、図書館の利用法をほとんど把握していないのだ。そこで、最初は新聞の縮刷版が置いてあるところに行き、各自が生まれた日の新聞記事を探すことからはじめていい。自分の生まれた日にどんな事件が起つたか、どんな番組が放送されていたのか、そんなことを調べるだけでも、自分自身の中で歴史というものを考える系口になる。

また、一学期終了前には、その時点で各自が興味をもっているテーマに関する簡単な口頭発表をしてもらう。この時点で発表したものが、必ずしもそのまま卒業研究のテーマになるわけではない。しかし、出来るだけ早期に、自分が興味を持てるテーマを探せるよう

な場を設定することが大切だと考えている。もちろん、徐々に軌道修正しつつである。

三年次二学期は、各自が現時点での研究対象としたいテーマに関連性のある本あるいは論文を選び、読み込む。そして、その内容を報告することにより、果たしてこのテーマで突き進んで行けるかどうか見極めて行く。進んでいる学生だとこの時期に資料の収集に入る。

また、卒論作成中の四年生の卒論中間報告を聞いたり討議に加わることによって、色々な研究テーマと、それら相互の関連性にも目が向けられる。さらに、学期末には、次年度の卒論準備段階となるような口頭発表を行う。この口頭発表の内容を、春休み中に再検討し、きちんと文章化して、四年次最初に提出し、卒業論文の最初のステップとする。というのがいわば理想的な流れであるが、まだまだ、テーマを変更したりする余地もある。たとえテーマを変更したとしても、方法論が身についていれば心配はない。

四年次は、上にも書いたように、ゼミ生全員の前で、何回か中間報告を行いながら論文の資料収集と構成を



和気あいあいのゼミコンパ

検討する。十一月中旬くらいから草稿のチェックに入れる。論文の前書き部分は、コピーしてゼミ生全員が目を通す。次年度の自分を見る思いがし、ある意味プレッシャーかかる、と感想をもらす三年生もいる。卒論を書くにあたっては、資料の引用方法など

書いておかねばなるまい。わがゼミでは、平均すると各学期二回ほどゼミコンパを開催している。ここにところ、やや人数が増えたといつても、もともと少人数のわがゼミでは、全員集まつても一テーブルで充分だつたりする（写真ではテーブルでないが）。人数が少なすぎて盛り上がりがないのも寂しいので、よく卒業生にも参加してもらうし、他のゼミ生や先生など飛び入りも歓迎している。そういうわけで、年齢が離れていて大学時代にはまったく顔を合わさなかつた先輩と知り合うこともあつて、在学生にはよい刺激になる。

最後にもう一つ。来年度のゼミ希望者が、珍しく十名を越えた。ゼミが以前に比べ活性化しているせいか、あるいは、この二年間、一年次の中国語演習を担当した方が理解しやすいの

は、言うまでもない。まあ大体こんな感じでゼミを進めている。筆者自身学生の頃よりは、手取り足取りでやっているつもりである。

(二一〇〇六年十一月記)

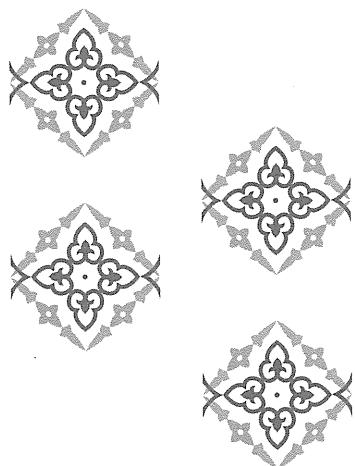
試論」(国際アジア文化学会大会第十二回大会研究発表 二一〇〇三年六月)

(注1) ちなみに、中国では毎年七月七日になると、

一九三七年のその日に起つた盧溝橋事件（中国では「七七事変」という）を振り返り、何らかのアクションがあるのが通例である。昨年なども大規模な反日活動があるので、と北京駐在の日本人の間では大変心配されていた。事件そのものの発生原因や評価は別として、なぜ七月七日なのか、という根本的な理由なり史実は知つておく必要がある。中国の人は、よく教科書問題を口にする。しかしながら、どの教科書にも書いてある事柄が、まったく日本の若者の頭に入つていないのでから、議論がかみ合わないどころか、議論にもならないお粗末さといえよう。

(注2) そのための具体的な試みに関して、筆者は、

かつて、国際アジア文化学会大会で報告したことがある。「中国語学習者のための中国史教授法



意境探求

外国语学部 準教授 野林 靖彦



岐阜県可児郡御嵩町におけるフィールドワークのこと。東部山間地域の集落小原生え抜きで元農協職員の木村茂美さんに「あれが田の神様だ」と教えられたものを見て、驚いた。どう見てもただの石。それも、たまたま、田んぼの畦に置いてあるようにしか見えない。そんなものが「神様(である)」と言うのだ。

この体験は、「意味」というものが、如何にして生み出されるかを教えてくれる。「意味」は、人が対象に向かい合つて、それに関心を注いだ時に発生するが、その関心に言葉が結びついた瞬間、言葉は、単に伝達ツールであるだけでなく、「意味」を生み出す道具としての価値を帯びて、我々の前に立ち現れてくる。

石の意味を決めているのは人間であつて、石自身ではない。石は、ただひたすらに石、それも「イシ」ですらない、ただのモノとしてあるだけなのだ。

田の神
御嵩町小原の「田の神」
などと云う。考えてみれば、この



・ゼミのテーマ—「意味」

野林ゼミのテーマは「意味」。学生の卒論テーマは多岐にわたっている。参考までに、平成十六年度の卒業生（これが第一期生だが）の卒論題目を紹介してみよう。

李 枝炫 「慣用句の固定性について—日韓身体慣用句を中心にして」

大重美和 「宮沢賢治『よだかの星』の解釈学—キャラクターが持つ記号的意味の言語論的解釈」

呉 賢修 「副詞『どうも』『どうやら』の意味分析—“syntagmとparadigmの相関”という観点から」

佐藤祥子 「類義語研究の意義—『イウ』『ハナス』『シャベル』等の類義語の使い分けを例にして」

松永幸香 「『枕草子』における色彩表現の解釈学—白が持つシンボリックな意味の言語的解釈」

宮崎麻美 「グリム童話集における『狼』、『狐』、『人

間》像の言語論的解釈—金田鬼一『改訳グリム童話集』をテクストとして」

李 銀姫 「中国語の状況把握推量表現—『好像』『似乎』『彷彿』と『ようだ』『らしい』などの対照を中心にして」

意味に関する現象であれば、どんなものでも構わない。ただし、言語研究の意義・目的といった根本問題に関する問題意識を持つて欲しい…そう思っている。それは、「言葉研究」は、単なる伝達技術の習得ではなく（つまり、いわゆる語学的学習にとどまるものではないということ）、それを使って日常生活を営んでいる人々（母語話者達）の“生活の論理”を探る研究であるということである。当然、言語の意味の問題に踏み込んで研究を行えば、おのずと文化研究の様相を帯びてくることにもなる。

・フィールドワークの重視

このゼミの特色の一つは、“フィールドワーク”で

ある。いわゆる（狭い意味での）方言研究をしようと
いうのではない。“日常言語（生活言語）としての日本語”的研究を志向して、毎年フィールドワークを実施しているのである（日常言語というものは、全て方言なのではないか。そうだとすれば、「方言／共通語」といった単純な二分法的図式を見直さなければならぬことになる）。

意味を生み出すのは研究者達ではない。ことばを用いて生活を営んでいる話者達によって生み出されるのであって、意味発生の現場は、彼らの「暮らしの現場」＝フィールドなのである。この当たり前のことを忘れないためにも、フィールドワーク重視の姿勢は今後も維持していきたいと考えている。

・ 意境探求のゼミを日指して

ゼミでは、言語研究で扱われている問題はもちろん、芸術や哲学、文学、さらには日常の何気ない話題や新聞ネタなど、様々な問題をとりあげ、意味論と言ふ切り口から考察を行つてゐる。

言語というものは、人間の知的活動の様々な領域に関わりを持つてくる。言語という「探し針」を用いて、人間の内面世界を知的に探求していくこと、これこそが「意味論」と呼ばれる学問であり、広い意味での「解釈学」ではないか。

このゼミでは毎年、論文集を作り、卒業生や関係各位に配布している。その論文集の題が『意境探求』である。「意境yijing」ということばは、日本語ではない。中国語で、コンテクストetc.を表す文学用語であるが、『意味の基盤世界』を表す語として実にふさわしく思われる。語彙の研究も、文法の研究も、文学テクストの解釈学も、みな、言語表現の背後に潜む「意境」の探求なのである。

ゼミはこの四月でようやく四期生を迎える。指導も行き届かないところが多く、日々未熟さを痛感させられている。しかし、いつの日か、学生達と共に歩む意境探求の成果が蓄積され、やがて大きな実を結ぶことを願つてゐる。

「野林ゼミ」という空間

平成十七年三月日本語学科卒業 松永 幸香



私は野林ゼミ一期生ということもあって、初めは先生の部屋で授業を受けていた。コーヒーの香りとジャズが流れる先生の部屋。お茶を飲みながらのんびりと進んでいく授業。

ゼミは、先生と学生の距離が近いので、質問もすぐできるし、発言もしやすかつたようになる。授業が終わって、先生の部屋で雑談したり、時には、お酒を飲みに行ったり、話したり、先生の家で先生の手料理をごちそうになつたり、こういう時間も、ゼミならではと思う。

野林ゼミといえば、意味論がテーマである。ここで勉強した意味論は、数学的な面がある。意味論というと、果てしないもののように思える。しかし、表を使つた意味分析することにより、果てしなく曖昧なものが、答えが見出せるものになるのは、画期的だなど

思った。そして、意味論のいいところは、何でも研究テーマになつてしまふところだ。意味のないものなんて無いからである。

フィールドワークがあるのも野林ゼミの大きな特徴だと思う。私の時は、岐阜県に行って、食に関する言語調査を行つた。共通語は、みんなに話が通じる便利さがある反面、なんだか機械的でつまらないように感じる。でも、方言というのは、これまで、培ってきた、様々な経験や歴史や生活感がある。共通語に囲まれていたら、出来ない発見が『ここ』にはあつた。

留学生と一緒にゼミの時間をすごして、見つかる発見もある。どの言語にも、意味というものは付いて回るし、また、日本語とは生活環境も価値観も違うことから、生み出されてくる意味の違いやその世界観が見えることは面白いことだ。それが生で見られるところは、麗大ならではじやないかなと思つた。

ゼミは、大学生活の中でも特別な時間だと思う。このゼミで過ごせたこと、社会人になつた今、貴重な時間だつたと思う。

ゼミ合宿を終えて



日本語学科四年 佐藤 紗子

フィールドワークというものが初めての経験だったので、初日はわからないことばかりでした。しかし、二件目三件目になるとだんだんと「相手から適切な回答を引き出す話術」がなんとなくわかつてきて、それと同時にその難しさも実感するようになりました。

語彙調査は「ただ単にインフォーマントから話を聞くだけ」というイメージがあつたのですが、実際はそんな簡単なものではないと今は思います。同じ質問でも、聞き方によつて答えが変わつたり、さつき聞いたときはNOでも今聞くとYESになつたり、非常に難しいものです。今回行つた調査も、三件ともそれぞれ特色があり、その人その人に合わせた話し方が求められていくと感じました。こういう調査は何回も繰り返していくことにより、その技術が身についていくのだと実感しました。先生が行つている調査

を記録するだけでも精一杯だったので、今の私には調査と記録を並行させるのは難しいです。でもいつかやつてみたいと思いました。

三日間ずっと一緒に行動していたので、ゼミ生同士の信頼・友好関係も今までより強くなつたのではないかと思います。非常によい体験をすることができました。

フィールドワークをして

日本語学科四年 金 英実



十一月十四日、私たち野林ゼミ五名は、"山の講"や"五平餅"と言語の関係を探り、そこに潜む"謎"を明らかにする目的で、岐阜県恵那市内と旧串原村（現恵那市串原）に向けて二泊三日の旅に出かけた。

郊外の秋を満喫しながら、初めて食べた恵那地方の郷土料理"五平餅"は、とてもおいしかった。恵那な

らではのこの食べ物からは、素朴な人情味を感じることができた。

日本の食文化にはいろいろな物語があるということ

をしみじみ感じた。例えば、山の神に感謝を捧げる男

だけの祭「山の講」で五平餅を作り供えるという行為には、山仕事の安全祈願といった“意味”があり、“五平餅”には“ハレ”的日の特別な食べ物といった“意味”が込められていることが分かった。学校では学べない、リアルな日本の姿（日本人像）を見た気がした。

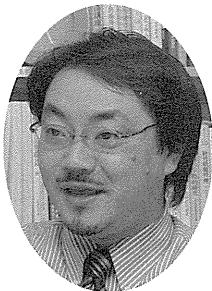
五平餅のような郷土食文化と言語学との間には密接な繋がりがあった。例えば、五平餅のことを「モチ」と呼んだり、「ヤキメシ」と呼んだり、「メシ」と意識したりするということから、その土地の人々の内面世界を知ることができる。今回のフィールドワークをきっかけとし、日常生活の中にある類義語の探求を卒論のテーマにしていきたいと思っている。



フィールドに到着。不安と緊張のゼミ生たち

わがゼミ生の感想記

国際経済学部 準教授 倍 和 博



二〇〇一年に産声をあげた倍ゼミの6年間を振り返ると、「自ら考え、実行する」をモットーに、ゼミ生全員で「会計学」について熱く語り合い、電卓と睨み合いながら、アツという間に過ぎた気がします。若者の可能性は無限大です。私もゼミ生に遅れをとらぬよう、何事にもこれまで以上に積極的にチャレンジするゼミナールを目指して、ゼミ生と共に成長していきたいと思っています。

学問の面白さを知るゼミ

平成十五年三月国際経営学科卒業

☆寺本 佳苗 竹内 勇人

倍ゼミナールが

スタートしたのは

二〇〇一年、私達

倍ゼミ一期生が大

学三年生になった年です。倍ゼミ一期生は三年生からのスタートだったため、五人という少ないメンバーでした。私以外のメンバーは会計を志望していましたが、

私が倍ゼミに入りたいと思つた理由は違っていました。私が倍ゼミに入りたいと思つた理由は違つていました。

会計学に興味があつたというより、二年生の後期に履修していた倍先生の講義内容が衝撃的に面白かったと言う方が正確でしょう。講義要綱に「倍ゼミナール」という文字を見つけると同時に、倍先生の研究室に伺



つたことを今でも覚えています。

「去年の講義にいたね、覚えているよ。このゼミに入るなら、今年中に簿記二級をとってね」とさらりと言われ、「はい、分かりました！」と即答していました。その後、学問に引き込まれ、大学院に進学することになろうとは思いもしませんでしたが、この簿記の勉強こそがその第一歩でした。

これまでの私を評して、友人は私の簿記に対する適性はゼロに近いと言つていきましたが、倍先生が教えて下さる簿記の精緻な仕組みに驚き、そして、簿記を支える哲学とも言える会計学の面白さや深遠さに惹かれていつたのです。多くのゼミ生がこれに魅せられて大学院に進学しましたが、就職した人、留学という道を選んだ人などもまた、卒業して五年を経た今でも学会やセミナー等で出会うことも多く、ゼミでインスピレーションを得たのでしょうか。

学問を面白いと考えたのは、勉強大好きDNAを持つているからではないと思います。少なくとも私はそうではありません。私が三年生の頃、会計不正が頻発

し、ゼミではそうしたトピックを取り上げましたが、その現象だけに焦点を当てずに、本来連鎖している学問と会社と現象を客観的に見つめ直すことで、その背景にある本質を追求してきました。また、ゼミという集団が円滑に進められるための要件や、協調の大切さなどは教えていただきましたが、勉強に関しては、各々が面白いと思う領域（会計学に限定せずに）を見出し、自律して進めていく以外ありません。「卒論は自分の興味のあるテーマをやればいい」とおっしゃつてくださいり、ゼミから離れた分野であっても研究の楽しさを優先してくれました。その他、勉強の過程で得た疑問を先生にぶつけると、その解答だけではなくプラスアルファの面白さを添えてくれます。そして、その面白さをさらに追いかけしていくようになり、やがて、自分でそのプラスアルファを発見することができるようになります。こうした体験こそが研究の楽しさを実感する瞬間であり、学問の面白さとなるのです。

一見難しいことを、簡単かつ興味を持たせるように説明する、また、面白さを見つける方法を学ばせてく

れる、倍先生の学問の伝え方はとても魅力的です。ゼミに入るまで知りませんでしたが、実は学問って面白かったのですね。もし、研究テーマ・選ぶゼミについて悩んでいたら、思い切って興味のある分野に飛び込んでもらいたいと思います。必ず今後の財産になりますから。そして、少しでも会計に興味があるならば、是非とも倍ゼミの門を叩いてみてください。自分に厳しく取り組むことで、充実した学生生活を送ることができますよ。

人生を変えたゼミ生活

平成十七年三月国際経営学科卒業

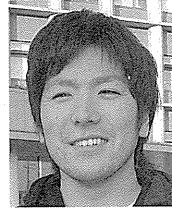
☆山賀 康弘 白田 貴之

私が倍先生と知り合ったのは、入学して間もない講義です。それから毎週、先生の会計学の講義に聞き入り、四年間の大学

生活について考えさせられ、公認会計士の資格をめざした勉強を始めました。その後、四年になつてから、当時は資格勉強一辺倒だった自分に対し、先生は社会科学に関する専門書を与え、枠にとらわれた資格のための勉強から、さらに広い世界をみせてくれました。この瞬間、「勉強」から「研究」の道へと導いてくれたのです。

倍ゼミには、ゼミ生それぞれの目指すべき方向は異なるとしても、仲間と切磋琢磨しながら勉強できる環境があります。勉強する時と、一緒に楽しむときのメリハリがあり、ゼミ全体に一体感をもたらしています。これが倍ゼミの特徴といえます。

先生の指導は、会計学にとらわれず、しかし、それがすべて会計学の研究に相通ずる基礎を教示します（実際は、先生の後ろ姿を見て学ぶのですが…）。「大学生は学問を自ら学び、他人から教わるものではない」とことを教わり、わからない箇所はすぐに先生を含む他人に聞かず、文献調査を行い、どうしてもわからない場合だけ質問するように心掛けてきました。これは、



私が倍先生と知り合ったのは、入学して間もない講義です。それから毎週、先生の会計学の講義に聞き入り、四年間の大学

研究するにあたり最も重要なことが、物事に対する考え方、捉え方を身に付けることであり、これを習得するには、「自ら学ぶ姿勢が大切だからです。この際、「批判的に捉える」ことで物事を是とせず、様々な観点から問題点について検討し、自分なりの論理で見解を導き出すことを実践します。独自の見解を主張する重要性を学んでいくのです。

また、後輩に対して積極的に指導することの重要性も説いています。「教育」と「研究」は表裏一体という考え方のもと、その考えに共感し、先輩が後輩に対しても積極的に指導することを心がけています。これは、実は先輩側へ試練を与えているのです。例えば、全く異なる分野を研究している学生を指導するには、教える側も理解していなければ適切な指導はできません。ただし、自分にとつて新しい知識を得る機会を与えてもらつたと解釈し、実践するのが倍ゼミ生なのです。

今では先生のご指導のおかげで、学会発表などをさせていただき、数多くの経験を積ませていただいています。研究の楽しさをゼミで説き、私達を導いてくれ

た先生には感謝の気持ちで一杯です。先生の姿勢から学ぶべきことはまだ多く、吸収していく日々です（そのため最近は、倍先生に似てきたと周りからは言われることも少なくありませんが）。先生の要求するレベルに達してはいませんが、先生に追いつけ追い越せでこれからも日々励んでいく次第です。

人間関係を築けるゼミ

平成十八年三月国際経営学科卒業

清水祐香 横田康代



私たちのゼミは
倍和博先生の下で
会計学を中心に勉
学に励んでおりま
す。ゼミの活動や先生の研究室で過ごす時間は、会計

学の知識を深める勉強の場であると同時に、学生生活と卒業後に控えた社会とをつなぐ「小さな社会」のよ
うな場でもあります。

例えば、倍ゼミでは大学二年次に会計学を学ぶにあ

たつて必要不可欠な簿記を学習し、基礎力を強化する演習があります。ここではグループに分かれ、ゼミの仲間と切磋琢磨しながら学習していきます。各グループには担当の先輩が就いているので、分からぬ箇所を質問し問題を解決することができます。その過程の中で、簿記の理解力の向上とともに、先輩・後輩との接触という機会を得ることができ、気軽に相談に応じてくれる先輩方と密接な関係を築くことができます。そのため、ゼミでは勉強面だけでなく縦の関係を築くこと^{ないがし}にしないことや先輩方から伝わってくるもの、さらに後輩たちに伝えていかなければならぬものなどを体験することができ、社会において必要なマナーや人間関係についても学ぶことがあります。さらには、ゼミの仲間と共に学ぶことでモチベーションが高まり学習意欲を維持することができます。

また、大学三・四年次では、ゼミのみんなで輪になり章ごとに発表担当を決めた上で、会計学の専門書を輪読していきます。現在は、『変わる社会、変わる会計』という本から、近年直面する日本および世界の旬の問

題について考え、最近の時事や会計制度と対比させながらゼミの中で議論し、幅広い知識の習得を積み重ねています。この繰り返しの中で、会計学の専門的知識だけでなく、「勉強の仕方」や「ものの考え方」を習得し、自分の視座を確立させていくことの重要性が理解できるようになります。

現在では大学のカリキュラムの中に専門職コースが創設され、ゼミの中でも税理士や会計士等を目指し、大学と専門学校を両立させながら勉学に励んでいる人の割合が増えてきています。会計は、企業の会計行為を認識、測定し、利害関係者に企業の財政状態や経営成績等を伝達する役割を果たすものです。しかし、今日では会計を利用した企業の不祥事が発生しています。このような経済、社会の変化の中で会計はどのように対応が迫られているのかを考え、知識だけでなく自分自身の考えをもつことができる人間を目指し、さらには人間関係やマナーなどを身につけながら会計学の研究を深めることができる場がこのゼミのいいところだと思います。

☆＝代表執筆者

座談会 「土井ゼミの秘密」

国際経済学部 準教授 土井 正



本特集のために、ゼミ内でミニ座談会を開いた。司会は、たまたま廊下を歩いていた、ゼミとは利害関係のない学生にお願いした。なお、(担当教員と違つて)将来のあるゼミ生諸君は匿名にしてある。

——まず、簡単にゼミの紹介をしてください。

ゼミ生A (ゼミ長) 土井ゼミは、国際経済学部の専門演習Ⅰ～Ⅲ (S13クラス) の通称です。シラバス的には、国際産業情報学科の新産業創成コースに置かれていますが、現在、国際経済・国際経営・国際産業情報三学科の二～四年生、計十名が在籍しています。

——ゼミの方針とモットーを教えてください。

土井 一に厳格、二に厳格、三四がなくて五に厳格だな、エヘン。やはり、ゼミに必要なのは甘えを排した厳しさでしょう。何よりも無駄口が一番いけない。僕は元々「石」と呼ばれるほどの無口なので問題ないけど、中にはしゃべり出すと止まらない輩もいるから

うになつて三年経ちましたが、正式な卒業生はこれまでもわずか六名という超弱小ゼミです。経営情報学、メ

ディア論、e-commerce、インターネット・マーケティ

ングなどをテーマに研究しています。

な。

B 先生それは「幻覚」です。げんかく違います。

C うまい！座布団一枚!!

B 話が止まらないのは先生です。しかも話がどんどん枝葉に広がるせいで、私たちの発表の時間がなくなりっています。次回のスケジュールを決めるだけでも、一コマ（九十分）じゃ終わらないじゃないですか。

土井 それはだな、人数の少ないゼミを少しでも盛り上げようとする、親心というか、この配慮と苦心の賜物とがだな、ブツブツ：（注・このあと聞き取れず）

B 先生の話が、ためにならないとか、くどいとか、いい加減だとかナマケモノだとかオヤジくさいとか、言っているわけじやありませんから…。

土井 よーしわかった、それなら「知徳一体」といふのはどうだ。いま思いついたばかりだが。

——そ、それは、間違いではないですが、建学の精神と同じじやないかと…。もつと土井ゼミならではのものはないですか？

土井 なるほど、どうりでどこかで聞いたことがあ

ると思つたはずだ。じゃあ、「研究室ではお菓子のカスを床にこぼさない」とか、「テレビのチャンネル権は教員にある」とかいう具体的なヤツの方がいいかな？

A じゃあ、やつぱり私が言います。ゼミのmaxims（原則）は、ちゃんと決まっています。「まず、動け」です。土井ゼミ（doi+seminar）の略称「doism」（＝行動主義）とかけています。つべこべ言う前に、まずやつてみる。具体的にいうと、誰かに言われたからでも、やらされるからでもなく、自分のために、いまやらなければならないことがあるはず。自分から動かないで、先生や先輩に一から十まで教えてもらえると思つたら大間違い。ましてや叱つてもらえるなどと甘えちゃいけない。土井ゼミ生は、将来の目標は自分で決める。研究のテーマも自分で決める。研究成果の公開先や方法も個々人がそれぞれ決めてよいことになっています。つまりは自分への挑戦というか、自分で決めたハーダルを越えられるかどうかとの戦いになります。裏を返せば、たとえさぼっていても、なまけていても、あるいは何一つ成し遂げることができなくとも、胸に手

を当ててみて、なんら恥じることがないのなら、これに勝る幸せはないんじゃないか、ということでしたよね。

もう一つは、ゼミへの貢献です。自分の勉強のためだけだったら、必修でもないゼミにわざわざ入ることはない。自分が組織に貢献できる何かを探すというのも重要な課題です。

土井 そうそう、そういうことが言いたかったんだ。
ゼミ長、今日は、すばらしくまともじゃないか。

——ゼミが始まった頃と比べて、ここ数年で一番大きく変わったことはなんですか？

土井 ゼミ内の連絡に、電子メールをほとんど使わなくなつたということですね。初めのころは、メーリングリストで夜通し議論してたりしていましたが、最近の情報共有は、「Webサイト」やケータイ中心に移行しています。かえつて情報活用スキルと、情報交換の密度および効率は上がっています。インターネット（双方向）性も、より高まっているといえます。

――最近のゼミ活動の内容を教えてください。

A 卒業研究に向けた個人研究はもちろんですが、今年度の全体活動として、輪読やディスカッションといったオーソドックスなスタイルのゼミ、他人に勧めたい本といったプレゼンテーション、そしてディベートなどを行っています。

テーマも、

死刑制度廃止
やいじめの問

題にはじま

り、南柏駅前

のスーパーで

採算性が良い

のはどちらの

店か？ ケー

タイのキャリ

アのオススメ

は？ など、本

当に身近でバ



土井ゼミWebサイト (<http://doism.net/>)

ラエティに富んだ課題を取り上げています。

土井 情報ネットワーク社会で最も大切なのは、さまざまなコミュニケーション能力ですかね。一見、学問や勉強とは対極にありそうなテレビやマンガ、アニメといったものからでも、学ぶべき点が多くあります。机やパソコンに向かうことだけが勉強ではあります。机やパソコンに向かうことだけが勉強ではありません。「目のつけどころ」が大事です。受験勉強じやないのですから、スタイルになることはないのです。

アンテナさえ正しく出していれば、日常（生活）の中にも題材がごろごろ転がっているのがわかります。ソリューションを学ぶ上での基本は、問題を解決するのが難しいのではなく、真の問題を発見すること、そして解決案を他人に納得してもらうことがより難しく、そして重要だということです。たとえば、よく出す課題に、「けさ南柏駅から学校まで、どのような手段で来ましたか？」なぜその方法を探りましたか？合理性を説明しなさい」というものがあります。

——ゼミ生には女子学生しか採らないというのは本当ですか？

D（男子） はい、はーい、はい、はい。目立たないかもしれませんのが、ここにいます。現役のゼミ生には男子もちゃんと二人いるのですが、OBはいません。全員OGです。僕も、男は土井ゼミに入ると卒業できないと、友達にずいぶん止められました（苦笑）。

——卒業生ともたいへん親しいと聞いていますが。
土井 卒業後、我が家に彼氏を連れて訪ねてきてくれたりと、自然と家族ぐるみの、大人同士のつきあいになってしまいますね。ここにいるみなさんとも、一生を通じたおつきあいになるものと思っています。

学生さんたちを見ていると、三年生になるころ、ちょうど二十歳を超えるころに、本当に大きく成長し、大人になると感じています。土井ゼミでは、自分のこと、将来のこと、そして社会について、自分の頭で考えるというトレーニングを繰り返し、思考法を刷り込まれますので、たいへんである反面、大きく成長してくれているのだと思います。

——それにして土井ゼミのみなさんは、仲が良く、いつも本当に楽しそうですね。

E 上級生が下級生の面倒を見る仕組みになつてい

一同（絶句！）

ますし、それに、卒業した先輩たちを含めても人数が少ないので。何でもおもしろがっちゃう、という先生の癖が、みんなに感染^{うつ}っているのかもしれません。

土井 人数が少ないのは、ひとえに担当教員の人気のなさのせいでしょうが、積極的な募集をしてこなかつたというのも大きいかもしませんね。

F ゼミの説明会に行つたら、先生とゼミ生みんなで楽しそうに弁当を食べていて、入り込めない雰囲気を感じました。とつつきにくいつていうか。先生がどうより、ゼミ全体が固まつていて怖かったです。

土井 何度も大きくやり方を変えようと思つたのですが、この人数だからできることやメリットもあるのではないかと。少人数教育を誇る本学の中でも、最小規模のゼミであることは間違いないですね。大学としての経営効率の面をもし考えるとすると、大いに問題ありかもしませんが。

——えーと、（注・土井からのメモを見て言葉につまりながら）先生はブラッド・ピッドに似ていますね？

土井 たしかに、彼は英語が上手で、僕の方が日本語がうまいことを除けば、偶然かもしれないが二人とも目も耳も二つずつで鼻と口は一つ、年齢も近いし、二足歩行ができるところなど、本当にそつくりだな。顔のパーセンテージや配置上はだいぶ違うけど、顕微鏡で細胞を見たらうり二つじゃないかな。

それに、幸いまだ誰も気がついてないようだが、僕はペ・ヨンジュンにも似ているらしい。ブログに彼の写真を張り、「作者近影」と書いておいたら、「ヨン様にそつくりですね（怒）」というコメントが二件もあつた。ゼミ合宿で韓国に行くのはもうやめておいた方が無難だな。間違えられてパニックになると困るし。それから：（注・暴走したまま時間切れ。やれやれ。）

*本文の内容は、虚構と誤解と理想と現実とが混濁しています。土井ゼミの眞の姿に触れたい方は、ぜひ土井研究室をお訪ねください。「麗澤教育」を見た」とおっしゃっていたらしく、コーヒーが無料になります。

都市経済学を通じて学ぶこと

国際経済学部 准教授 佐藤仁志



私のゼミでは、都市や地域で生じる様々な問題に対して、経済学の知識を用いて原因の究明と解決方法の提案を行うことを目標としています。このような目標に向かうために、都市経済学をゼミ生が共有する基本的知識として学んでいます。しかし、現代のような巨大都市は複雑なシステムの象徴のひとつです。そのため、非常に身近に存在する問題であっても、多数の要因が影響し問題の根本的な原因を探り当てることは困難です。そこで、ゼミでは都市経済学だけではなく、都市や地域に関連する内容を幅広く学んでいきます。

ゼミ活動を通してゼミ生に身に付けてもらいたいことは、問題発見能力（存在する事象に含まれる問題を見つけること）、問題解決能力（問題の原因究明・解決方法を見つけること）、成果説明能力（得られた成果を第三者に説明できること）の三つの能力です。上記の能力を身に付けるために、現在は以下のようなスケジュールでゼミを行っています。

三年次は、四年次で卒業論文を作成するために必要な知識と能力を身に付ける期間と位置づけています。一学期は都市経済学に関する文献講読などを中心に行い、都市・地域という対象に対する理解を深めます。二学期は、自分で問題解決を行うために不可欠である

データ分析の能力を身に付けてもらうための演習を進めています。また、三年次では他者と協働する能力を身に付けてもらうために、必ずグループで取り組む課題を設定しています。そして、ゼミの演習を通して得た成果はプレゼンテーションによって他者に説明してもらいます。

四年次では、都市・地域に関連する部分からテーマを各自で設定し、卒業論文を作成していきます。卒業論文の作成が、これまでのゼミの学習や通常の講義と大きく異なる部分は、自由度の大きさにあると思います。三年次までのゼミや通常の講義における課題は、課題に対する答え（成果）に至る過程にそれほど自由度はありません。しかし、卒業論文ではやや極論になりますが、「良い卒業論文を完成させてください」という成果のみを求めており、成果に至る過程は何ら制限されていません。ただし、完成に至る過程は異なつても、卒業論文の完成には次の三つの段階を順に越えていく必要があります。

まず、良い（興味深い）卒業論文にするには、興味

深いテーマから適切な仮説を設定することが重要であり、問題を見つけ出す能力とともに問題を設定する能力が必要になります。なぜなら、見つけ出しただけの段階では、多くのテーマが漠然としたものか非常に壮大なもので、そこからすぐに卒論に取りかかることはできません。そこで、テーマから適切な問題設定をする必要があります。この段階では、テーマを見つけ出すために今まで以上に社会に対しても興味を持つてもらうとともに、自分の持っている能力や条件を十二分に活用できる問題を設定できるバランス感覚を身に付けてもらいます。次に設定した仮説を証明するために、必要な手法を設定します。ここでは、仮説を証明するため最も良い調査・分析方法を設定する知識と、調査・分析を行う能力、得られた結果を考察する能力が必要となります。多くのゼミ生が、三年次に身に付けたデータ分析能力を、もう一段階上にステップアップさせ自分の力とします。最後に、都市や地域の問題は一人の力だけでは解決することができません。得られた成果（問題の解決方法）を説明し、第三者に理解・

納得してもらうことが必要となります。そのため、各自の調査・分析で得られた成果を、文章だけでなく図・表などの様々な方法で他者にわかりやすく表現していくことで、プレゼンテーション能力をより一層向上させてもらいます。

まだまだ私自身が試行錯誤の段階であり、こちらの意図を十分に伝え切れていない部分もあると思います。しかし、例年こちらの予想が良い意味で裏切られる場面に必ず出会います。今後もこのような場面を生み出せるゼミになる努力をしていきたいと思います。

ゼミ活動を通して学んだこと

平成十八年三月国際産業情報学科卒業 林 静芳



三、豊富な知性と感性を得たことと私は答えるだろう。

もし、「ゼミの活動を通して得たものは何ですか」と尋ねられたら、迷わず、一、問題意識を明確化し解決する能力、二、学ぶことの面白さ、



2005年9月のゼミ合宿から

これまで佐藤仁志先生の下で、「都市経済」について学んできた。三年次のゼミでは、まず、都市経済・地域経済に関する理論の本を輪読し、基本的な知識の習得を行つた。次に、パソコンを活用することによつて、様々なデータから、「都市に生じる現象の解明をする」という演習を行つた。この演習では数人でチームを組む、テーマを決め、データを探し、加工し、そこから何が言えるかをまとめ、発表した。

四年次に進級すると卒業論文の作成において、自分でテーマを設定し、そしてデータを収集・加工してから学んだ理論を実際に応用していくことになった。さらに、作成する過程では、先生からアドバイスを頂き、最終的にゼミでの発表会で報告を行つた。卒業論文の作成は問題の所在の見つけ方や分析方法などはゼミで学んだことの集大成となつた。

また、春・夏・秋の合宿では、ゼミ長を中心に、副ゼミ長、コンピュータ係、活動係など全員で連携し分担しながらゼミの活動を進めた。その活動の中で、統計学の基礎理論・データ解析（Excel, GIS, SPSSなど

の操作を含めた）技術を身につけ、また演習を行うことによつて統計データの読み解力を向上させることができた。

このような活動を通じて、ゼミで多くのことを学び習得してきた。その中で、私自身の考え方や意識が大きく変化することになった。すべての物事に対しても、常になぜだろうという疑問を持つようになつたのである。私は疑問を抱くというのは大事なことだと思うし、絶対に私自身のプラスになつていくと思う。

ゼミでは、多くの事を勉強しなくてはならない。そのため、私は限られた時間の中で、多くのことを両立させるために、時間に優先順位をつけ、有効な時間の活用が的確に行えるようになつた。中には、ゼミに入らないで、適当に頑張つていれば大体のことはこなせるだろうと思う人もいる。しかし、ゼミでの輪読・チームワークなどの分担という過程の中で、『ゼミを順調に進行するためには』という責任感を強く持つようになつたのである。また、各チーム間の競い合いがある、他のチームには負けたくないという気持ちから、

のような责任感が生まれたものかもしれない。そういう

つたことがよい刺激となり、自分から動くようになつた。チームで集まつて話し合つたり、分からぬことがあれば積極的に先生を訪ねたり、以前の自分だったら考えられないほど成長した。特に、「苦しい中で楽しさを見つけ、やり遂げる」ということを実感し、充実した大学生活を送ることができた。

現在私は、「地域医療の現状と課題」というテーマで研究を行つてゐる。今後もゼミの活動の中で習得したことを探まえて、自ら積極的に活動していきたいと思う。

ゼミは実力養成の場

—現実の社会問題を題材として学ぶ—



平成十九年三月国際産業情報学科卒業 三宅 貴子
ゼミでは自分の興味のある分野の内容を、演習を通して深く学んでいきます。この特定の分野に的を絞つて学習することが、自分の実力を養

成することに繋がると思います。

私の在籍する「佐藤ゼミ」は、都市経済学に関心のある学生が所属しています。都市経済学は、街の再開発事業やシャッター通り商店街の問題など、現在の都市が抱える問題に対しても取り組み、最終的にこのような問題の解決

策を提案することを目標と

しています。

私がこのゼミに入ろうと考へたのは、

小学校時代に

“街の環境を

良くするバス

ターミで六回

入賞したこと

と、出身高校付近の再開発



2006年3月柏駅前通り商店街におけるアンケート調査

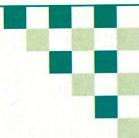
によつて街がきれいになつていく様子を目の当たりにしたことがあつたことが挙げられます。自分の住んでる街の住環境が良くなることを身近に感じたし、将来どんな街にすることが望ましいか自分自身で考えてみようと思いました。

研究したテーマのひとつに「柏駅前通り商店街再開発計画」というのがあります。これは柏駅前で「街の住みやすさ」について三百人にアンケートを取り、その結果に基づいてどのように再開発を進めればよいかを考えました。アンケートの声に耳を傾けることで、自分たちの視点では気づかなかつた点に気づくことができました。例えば、違法駐車は周りに駐車場が少ないから起こっていることや歩行者天国は良いと考えている人が多いこと、また高齢者にとって歩行者空間は、ゴミゴミしていく歩けないに近い状況にあることや段差があつて躊躇する原因になるなど利用しにくいという事実です。調査の結果、年齢や利用頻度によつて意識の違いがあることが分かり視野が広がりました。そして、その場に生活する多くの方々の意見を聞き、紙面上だ

けではない生きた社会問題について触れることによつて、問題に対する知識が深まりました。最後に自分が出した結果を商店街の方々に報告したところ、「学生の視点と、利用者の視点に立つた報告で役立つた」とおっしゃつて頂けました。

このように佐藤ゼミでは、現実の社会問題を題材として学ぶことができます。これから社会に出る上で上記のような経験は貴重だし、曲がりなりにも社会問題に対する結論を出せたことは自分自身の自信にも繋がります。

最後にゼミの雰囲気ですが、同じ目標を掲げた同士の仲はとても良いし居心地がよかつたです。私は、大学生活という大切な時間をこの佐藤ゼミで過ごせたことを誇りに思います。



ひったくり犯逮捕に協力した国際経済学科3年の福島康徳君に柏署から感謝状(2006・10・10)



きもの装いコンテスト関東大会・振袖の部で優勝した江島未希子さん=中央(2006・11・19)



第83回箱根駅伝予選会で19位と健闘した陸上競技部
(2006・10・21)



日本の伝統文化「もちつき」を楽しむ留学生
(2006・12・8)



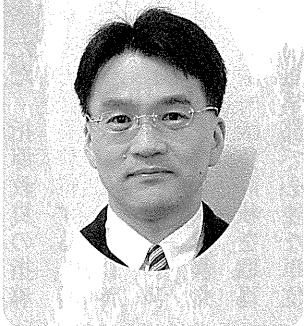
再会を喜び合うホームカミングデイの参加者たち
(2006・11・19)



米国の高校と、本学、慶大の3校で行われた合同テレビ授業(2006・12・16)

大学院言語教育研究科に 英語教育専攻が新設

外国語学部・大学院言語教育研究科 教授 渡邊 信



《はじめに》

平成十八（二〇〇六）年四月、英語教育専攻（修士課程）が開設されました。本専攻は麗澤大学の新しい顔「生涯教育プラザ」五階にあり、最先端の教育・研究環境を提供しています。長い準備期間を経ての開設で感慨もひとしおです。多くの先生方・事務局職員の皆様が本専攻の設立に携わって来られたのです、特に坂本比奈子前言語教育研究科長（現図書館長）ならびに鷺津泰邦プラザ事務課長のご尽力なしに英語教育専攻は産声を上げることはなかつたと思います。また、梅田博之前学長ならびに田中

駿平常務理事にも本専攻実現のために並々ならぬご尽力を賜りました。冒頭この場を借りて感謝申しあげます。皆さんを作り上げてくださった英語教育専攻を私ども担当教員が力を合わせ大きく育てていかなければなりません。責任の重さを痛感します。

平成十八年度は、開設初年度にも関わらず、募集人員六名を大幅に上回る十名の新入生を迎えることができました。本学に相応しい国際色豊かな顔ぶれで、タイから二名、中国、ブータンから一名ずつ、合計四名の外国人留学生が入学しました。日本人学

生六名のうち四名が実社会での経験があり、学部とは違った大学院らしい人員構成になっています。

本語学科、国際経済学部、また学外からも優秀な志願者を受け入れております。

《概要》

英語教育専攻は修業年限二年の修士課程で、修了時に文学修士の学位が授与されます。高度な英語力をもとに、英語学・英語教育学・異文化コミュニケーションという学問を探求し、専門領域の英知と英語力を駆使できる英語教員、研究者、企業等で活躍する人材の育成を目標としています。外国語学部英語学科の教員を中心に組織され、中右実教授（英語学・言語学）、中山理教授（学長、英文学）、望月正道教授（英語教育学）、クリス・マクヴェイ教授（異文化コミュニケーション）、ケリー・ハル准教授（言語学）、そして渡邊（英語学、言語学）が参加しています。また国際経済学部からも八代京子教授（異文化コミュニケーション）が参加されています。英語学科からはもちろんですが、ドイツ語・中国語・日本語

《カリキュラム概要・三つの研究領域》

本専攻には①現代言語学理論による英語学研究を行う英語学領域、②英語教育学諸分野の研究をする英語教育学領域、③ネイティブスピーカーの教員を中心とした高度な英語運用能力を身に付けさせる英語実践領域の三領域に多彩なクラスが用意されています。

修了後、企業就職をめざし、教師・研究者を志さない学生のニーズに応えるために修士論文の作成を選択制としたのも特徴です。ただ、指導教員の指導のもと、専門領域の調査・研究方法を修得する「特別研究」が必修となっています。

本専攻二年の課程を修了すると、高等学校・中学校教諭専修免許状（英語）を取得することができます。学部で高等学校・中学校教諭一級免許状を取得しなかつた場合には、本学外国語学部で必要な単位

を取得すれば、一級・専修両方の免許状の取得が可能です。この場合、学部の授業の履修料は免除されます。

また、日本語教育学専攻および比較文明文化専攻で開講されている、言語学・地域研究・文学・文化等の科目も履修できる柔軟なカリキュラムです。

本専攻の三つの学問領域についてもう少し詳しく説明しましょう。

① 英語学領域.. 現代言語学理論による英語学研究を行い、生成文法理論・認知言語学・語彙意味論・語用論・機能論・類型論・構文文法・談話分析・音声学／音韻論など、多様な言語研究の方法論を通して、英語学研究の土台を築きます。

② 英語教育学領域.. 英語を効果的に教えるために最善の方法を選択できる英語教員の育成を目指します。第二言語習得理論、コミュニケーション言語能力、自律的な学習者の育成、英語知識の指導、四技能の指導などを基礎として学びます。さらに、リーディング論・ライティング論・教材論・語彙論・テスト

論など、さらに高度な知識と技術を身につけます。

③ 英語実践領域.. 半分をネイティブスピーカーによる演習とし、異文化コミュニケーション研究・英語語法研究・英文リサーチライティング・英語プレゼンテーション・英語翻訳論などを通して、高度な英語運用能力を身につけます。

『教育環境』

英語教育専攻の院生研究室および教員共同研究室は平成十八年四月にオープンした麗澤大学生涯教育プラザ五階にあります。プラザは本学の新しいシンボルで、大学院の教育・研究活動をはじめ各研究セミナーの活動、オープンカレッジでの社会貢献活動などを進める場です。院生用のスペースは二十四時間利用でき、夜を徹して『楽しく』研究に打ち込むことができます。噂に聞いた話では、炊飯器を持ち込んでいる学生さんもいるとか。住み込み状態で論文を執筆するのもきっといい思い出になります。

プラザは地下一階、地上五階建て。一、二階は大学院やオープンカレッジで利用する教室（ガラス張りで廊下を歩いている人と目が合うのが難点か）、三階は情報システムセンター、四、五階が大学院および研究センターとなっています。院生室からは筑波山がきれいに見え、眺望も抜群。きっといい研究成果が出せるでしょう！

《谷川オリエンテーションキャンプ》

麗澤大学の特徴のひとつは教師と学生の近さです。

英語教育専攻の新入生はこのよき伝統を毎年恒例の言語教育研究科・国際経済研究科合同の宿泊オリエンテーションで実感することとなります。平成十八年度の宿泊オリエンテーションは四月十五日（土）～十六日（日）の一泊二日の日程で谷川セミナーハウスで行われました。バス二台をチャーターし、天候にもたいへん恵まれました。途中、群馬県の原田農園に立ち寄りバーベキューを楽しみました。これ

には純和食が苦手なマクヴェイ先生も大喜びでした。

谷川セミナーハウス到着後、午後二時半ごろから研究科ごとに分かれて研修を行い、先生お一人お一人から授業の内容を聞く機会を得ました。みなさん大変緊張しているようでした。この後、梅田前学長の講話があり、大学院での研究や学祖のことなどに耳を傾けました。夕食後の懇親会が始まるころには、新入生たちも緊張感から解放されて先生や上級生を交え、夜遅く（というか、朝まで）熱く語り合っていたようでした——私は一時には寝たので伝聞です。

二日目は午前七時起床で、朝食前に全員で（なんと）ラジオ体操をしました。外国人教員は少し面食らったようですが、これも異文化体験でしょう。この日は見学が主体で廣池千九郎博士の臨終の地の大穴記念館やサントリーリー利根川ビル工場などを見学しました。工場では特別に企業理念等のお話を聞いていただき、ビル製造の工程も見学しました。できたプレミアムモルツをいただき、ほろ酔い気分で工場を後にしました。

《研究発表会》

修士課程の二年間はとても短く、研究成果をあげるには一年次から指導教員と計画的に研究を進めなければなりません。英語教育専攻では、修士論文は必修ではありませんが、大学院での研究にふさわしい方法を修得しなくてはなりません。そこで、英語教育専攻の院生全員が研究の進捗状況を報告しあい、それについて、意見を交換する研究発表会を平成十八年十月二十八日（土）、十三時三十分～十七時、生涯教育プラザ、プラザホールで実施いたしました。一人持ち時間二十分（発表十五分・意見交換五分）で、発表者は幾分緊張した様子でしたが入学後半年の研究成果を披露し、活発な討論が行われました。今後も精力的に研究を続け、修士の学位にふさわしい、出版可能な修士論文・研究報告書を提出できるよう精進してほしいものです。発表会終了後、懇親会を開催し、労をねぎらい親睦を深めました。

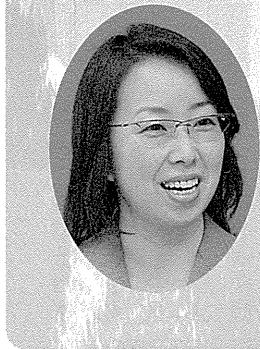


研究発表の後、全員で

速水名誉教授資料本学へ

サンキュー、「Francisco de Xavier！」
サンキュー、アキラ・ハヤミ！

外国语学部 教授 黒須里美



フランシスコ・ザビエル (Francisco de Xavier) といえば、カトリック教会 (イエズス会) の宣教師で、一五四九年日本にはじめてキリスト教を伝えたことで有名である。速水融 (Akira Hayami) といえば、麗澤大学名誉教授、文化功労者 (二〇〇〇年～)、学士院会員 (一一〇〇年～) で、一九六〇年代に日本にはじめて歴史人口学の理論と方法を取り入れ、それまでの江戸時代についての常識を覆す、民衆の様々な経済学的行動を明らかにしてきた業績が国際的に評価されている。

さて、この二人の共通点は、といえば、「キリスト

教」である。ザビエルが日本にキリスト教を布教したため、徳川幕府はそれを弾圧する意味で、「宗門改め」を開始した。村人たちが「踏み絵」をして、所属する寺を示し、自分たちが仏教徒であることを示す」とから始まった調査である。この記録が「宗門改帳」である。幕府のキリスト教禁止政策の產物として、鎖国のころ（寛永十四年—一六三八）から幕府直轄地で始まり、寛文年間（一六六〇年代）には全国で作成されるようになった。

一方、一九六〇年代、ヨーロッパ留学で「歴史人口学」という新しい学問と出会った速水融は、現代

の人口調査に劣らないこの「宗門改帳」を利用する
ことを思いつき、そこから日本の歴史人口学の道を
切り開いていった。日本の歴史人口学の原点は、ま
さにこの「宗門改帳」なのである。ザビエルが日本
にキリスト教を布教しなければ、決して作成され
ことはなく、日本の国勢調査前の人口・家族・社会
に関する研究も花開くことはなかつただろう。歴史
の皮肉である。そゝで、"Thank you, Francisco
Xavier!"（速水一九七九年論文より）となる。

本年度、この「宗門改帳」をはじめとする膨大な
資料が、速水融から麗澤大学に寄贈された。速水融
が、過去四十年間に収集した宗門改帳は、マイク
ロ・フィルム千五百リール、村×年数、一四、五三
九に及ぶ。幕末期には約三百町村に及ぶこの史料は、
江戸時代の町村数が六〇七万であることを考えると、
全国にならせばその〇・五%をカバーすることにな
る。これだけの宗門改帳の収集を行つた機関は他に
はない。また、宗門改帳は、江戸時代の日本の歴史
を、底辺から再構築させうる様々な活用が可能であ

る。このような研究は、他の社会では、スウェーデンなどの僅かな例外を除き実行出来ない。そういう意味で、日本の宗門改帳を人類の「世界遺産」とする外国人研究者もいるくらいである。この寄贈によつて、麗澤大学はまさに日本の歴史人口学研究の拠点としての一歩を踏み出したといえる。"Thank you, Akira Hayami!"と一言申し上げたい。

寄贈資料と新しい研究の可能性

速水融寄贈の資料は、上記宗門改帳のマイクロ・
フィルムだけではない。資料を整理するために作成
された、マイクロ・フィルムの焼付け製本、そして、
それらの古文書をだれでも読める形で整理したBD
S（基礎データシート）も含まれる。BDSと呼ば
れる世帯ごとの、その構成員の毎年の年齢、出来事
を記録しているシートは、八、六五九村×年分に及
ぶ。さらにBDSを基に記載されている個人個人の
ライフ・ヒストリーをコンピュータ入力したデータ
も含まれている。宗門改帳は、原則として毎年、全

住民を対象とし、町や村を単位として作成された。世帯ごとに、戸主と世帯構成員の名前、男女別、続柄、年齢、それぞれの所属する仏教寺院とその宗派が記されている。前年との間に変化があつた場合は、その理由、年月、移動の場合は地名等が書かれている。場合によつては、所持する土地の価値を米の量で示す持高、家畜まで記録されている。つまり、その内容は現代の戸籍と様々な社会調査情報を重ねたようなもので、現代人口資料にも劣らない、むしろそれ以上に詳細な情報を得る事が可能な資料なのである。

これらのミクロ資料のほかに、マクロ資料も寄贈された。明治十七年に始まる全国の「府県統計書」の、明治・大正年間についてプリント・製本した約五千百冊である。地方人口統計として貴重なこれらの府県統計書は、マイクロ・フィルムの形で存在するが、研究利用しやすくするためにプリント・製本されたものである。必ずしも全国が統一された調査項目、書式によつたわけではないが、都市別・郡別

の人口はどの府県統計書にも記載されており、人口・衛生・教育を含む様々な視点からの研究材料となりうる。

対象を個人の行動まで絞ったミクロ資料による顕微鏡を用いた観察と、市町村を単位とするいわば望遠鏡を用いた観察、この二つを結合することによって、日本の人口と社会の長期的検討が可能となる。この研究の重要性は極めて高い。人口減少期に入り、決定的な転換点を迎えている現在の日本について、長期的視点にたつて人口・家族・社会を考察することにより、その普遍性や特異性に新しい光を当てることができよう。

REITAKUアーカイブをめざして

これらの膨大な資料群を整理し、これらの資料を利用した人口・家族・社会の長期的研究を継続・発展させる目的でスタートしたのが、「人口・家族史研究プロジェクト」である。麗澤大学・経済社会総合研究センターのプロジェクトという位置付けで、二

○○六年度から筆者が代表となつてスタートした。プロジェクトは、大量資料群の物理的な整理からはじまつた。これまで麗澤大学東京研究センターと、慶應義塾大学内の研究室や図書館に散逸していたミクロ・マクロそれぞれの資料が、二〇〇六年八月、



シンポジウム「史料が語る日本の人口・家族・社会」から

一斉に麗澤大学図書館に移された。現在も、図書館四階プロジェクト室、三階資料室にて、史料の整理・入力作業が続いている。

二〇〇六年十二月、ブ

大学図書館に移された。現在も、図書館四階プロジェクト室、三階資料室にて、史料の整理・入力作業が続いている。

国際的にも、日本の史料の持つ歴史人口学研究上の利点は大きく評価されている。速水融代表で筆者も幹事として参加した、一九九五年のユーラシアプロジェクト（文科省・創成的基礎研究「ユーラシア社会の人口・家族構造比較史研究」）より、同種のすぐれた史料を持つ中国（東北部遼寧省）、イタリア

プロジェクトの立ち上げを記念し、歴史人口学資料どのように活用されているのか、これまでの軌跡と最新の成果を紹介するという目的で展示とシンポジウム「史料が語る日本の人口・家族・社会」を催した。シンポジウムは全国三十近い大学研究機関の研究者、出版社、麗澤オープンカレッジ受講生、大学院生、一般を含む百名を超える参加で大盛況となつた。本アーカイブ及び研究についての関心の高さと、研究発展の可能性が示されたといえよう。梅田博之学長挨拶における、歴史人口学・家族史アーカイブの立ち上げ宣言とともに、内外の認知を受け、いよいよ正式に、本プロジェクトが第一歩を踏みだしたといえよう。

二〇〇六年十二月、ブ

国際的にも、日本の史料の持つ歴史人口学研究上の利点は大きく評価されている。速水融代表で筆者も幹事として参加した、一九九五年のユーラシアプロジェクト（文科省・創成的基礎研究「ユーラシア社会の人口・家族構造比較史研究」）より、同種のすぐれた史料を持つ中国（東北部遼寧省）、イタリア

(北部)、ブルギー（ワロン語地域）、スウェーデン（南スカニア半島）を含む五つの社会の比較研究を継続して行つてゐる。その成果は、国際経済史学会、アメリカ及びヨーロッパの社会科学・歴史学会などで反響を呼んでゐる。また、"Eurasia Project"として国際的に認識されるようになつた私たち五カ国の比較研究が、1100四年、研究成果の第一巻目として「死亡」の研究をまとめた、*Life under Pressure, Mortality and Living Standards in Europe and Asia, 1700-1900* (MIT Press) も、昨年、アメリカ社会学協会 (American Sociological Association) から The Outstanding Book of Asia Award for 2005 を授与された。続いて第11巻の津谷典子（慶應義塾大学）・Wang Feng (University of California, Irvine) ・George Alter (Indiana University) が中心の出生の研究がほぼ脱稿の段階にある。第11巻は黒須里美・Christer Lundh (Lund University, Sweden)を中心にして、「結婚」の比較研究が続いている。

現在、世界では、歴史人口学資料のデータベース化とそれを中心とした研究に、莫大な資金が投入され、巨大プロジェクトとして立ち上がり、さまざまな成果をあげ始めてゐる。本年より、共同研究メンバーである、スウェーデンチームは、Swedish Research Councilによる「最先端的研究」グループとして長期の助成金（十年間で約十二億円）を得て、一研究グループから、歴史人口学研究センターへと変わりつつある。また今後共同研究を進めていく計画のある韓国では、やはり長期間にわたる助成金（十年間で約三十五億円）を得、ソウルの成均館大学において、李朝時代「戸籍大帳」のデジタル化と、整理作業が進んでゐる。一部地域についてはCD-ROMによる利用も出来るようになつてゐる。世界でも稀有の人類の「世界遺産」である日本の宗門改帳が、麗澤大学においてデジタル化され、世界各地における同様のアーカイブとの間にネット・ワークを構築するならば、詳細で確実性の高い民衆の日常生活の分析に基づく、新しい歴史学・社会科学の創造が展望される。

E-Loungeで 気軽にプロ留学してみませんか

英語学科三年 谷口貴美



1100六年の四月、麗澤大学に英語サロン、E-Loungeがオープンしました。月曜日から金曜日の十一時半から十七時半まで、英語が母国語の Clyde Lewis先生がいて、いつでも英語で話せます。私はオープン時からできるだけ空いた時間を見つけて利用しています。リリード Clydeは会話をし、英会話を上達させるには経験を増やすことが一番だとE-Loungeへ行くたびに強く実感しています。

E-Loungeのオープン当初、外国人の先生に英語で教わり、英語でコミュニケーションをとっているので英語を使うことには慣れたはずだと思つていました。

たが、いざ自由に会話をするとなると自分の英語が伝わるかどうか不安になり、伝わらなかつたら恥ずかしいという感情でいっぱいになつてしまつています。初めはそんな私でしたが、Clydeは私の発話を気長に待つてくれました。間違いがあればさりげなく直してくれて、正しくない文法を使っていても理解しようと努めてくれます。間違うのが不安と感じる私に、"It is not bad making a mistake." 「間違いは悪いことじやない」といつも勇気付けてくれました。この言葉のおかげで今となつてはいつでも気軽にE-Loungeへ行って会話を楽しめるようになりました。

英会話が完璧になつたわけではないけれど、不安や緊張という気持ちがほとんどなくなりました。英語を話すことが楽しいと思うようになりました。このことは英会話を上達させる大きな鍵だと思っていました。間違うことへの不安は英語を話すことを遠ざけてしまします。英語を話すことから遠ざかってしまふと英語を使わなくなつて、英会話のスキルは上達しませんし、上達しなければ英語を話すことへの不安は消えません。この悪循環を打ち破つてくれるのがE-Loungeだと思います。

E-LoungeにはネイティブスピーカーのClydeがいるだけでなく、たくさんの英語のスキルを上達させるイベントやゲーム、DVDが揃っています。カードに書かれた英語の言葉を説明するゲームで単語を増やしたり、ゲームから新しい知識を得たり、コメディー やホラー、ラブロマンス、ジブリ、ディズニーなどさまざまなジャンルの映画を見ることでリスニング力を鍛えたり、感想を英語で表すことで、自分の気持ちを文にする練習、常に流れているCNNのニュース。

E-Loungeでは週毎にテーマが決まっています。"Discrimination"「差別」だつたり、

ースを見て、世界情勢を知つたり、絵本を声に出して読み、内容を理解しながら発音の練習をしたりしています。友人と利用することで友人の英語を聞いてお互いのよい刺激になる」とよくあります。では、いくつかのイベントを紹介したいと思います。まず本学に通う留学生が行う「Guest Lecture」です。スリランカやドイツ、中国など世界各地から集まつた留学生が自国の紹介を英語でしてくれます。文化や習慣、食生活、経済など、教科書や地図には載つていらない本当のその国の人々の姿を知ることができます。次に「Movie Night」です。週に一度、放課後に映画を観て、感想をディスカッションします。もちろん英語で観るのですが、難しい場面はClydeが説明してくれるので安心して観ることが出来ます。映画を見るとき日本語の吹き替えで観てしまうことが多いので、このイベントは英語に挑戦するよいきっかけとなるつてくれます。

"Romance" 「愛」だつたり、やがてまなテーマがありまや。このテーマに沿つてお互ひの意見を交換し合ひます。"Romance" の週はどんなシチュエーションがロマンティックと感じるか、ロマンスとは何かなどを留学生と話して国別に比較しました。そして、改めてお互いの国の違いを知りました。"Discrimination" がテーマの週は、Clydeがアメリカの差別の現状についてレクチャーをしてくれました。その現状というのは、今でもアメリカには Black school が存在しており、Black school では生徒の数に対して圧倒的に教科書の数が不足している状況で、その結果十分に学ぶことができず、黒人と白人の格差がなかなか埋まらないのだそうです。これは私にとって大きな衝撃でした。今なおアメリカに残る差別の現状を聞き、新しい知識とともに今まで関心が向いていなかつたことに関心を持ち始めました。

もうひとつ私に大きな衝撃を与えたのは思わぬゲストからでした。前期の終わりにUNHCR（国連難民

高等弁務官事務所）に勤める方が、E-Loungeに来られて、難民問題についてレクチャーしてくださいました。難民問題に興味は持っていましたが、日本ではありませんで関係のないことだと思い、難民について調べたりしたことなく、難民についての知識がありませんでした。しかし、レクチャーを受け、日本でも難民は発生しており、日本で難民としての受け入れを待っている人がいること、難民が生まれる原因、現地の状況などを知り、今まで関係が無いと思っていた自分が恥ずかしくなりました。

このようないくつかやディスカッションがすべて英語で行われています。自分の興味あることや身近にある問題、どれも教科書や辞書には載っていないリアルタイムに起こっていることと英語が一緒になることで、英語を効果的に聞いたり話したりすることができます。このようなイベントを通して、自分が知らないたくさん興味深い問題に関心を持つてきました。E-Loungeを利用していなかつたらきっとどうれもいまだに発見できずにいただろうと思います。

E-Loungeで得られるのは英語のスキルだけではありません。ここには、全学部学科の学生が訪れます。一緒にゲームをしたり、会話をしたりすることで普段なら係わりの無い学生と友達になれます。私はこの大学に入学し、たくさんの留学生を見て、ぜひ友達になつて会話をしたいと思つていました。私はこのなかきっかけが無くて話せないでいました。しかしE-Loungeで何人の留学生と出会い、友達になることができました。最近ではここが私に新しい出会いを与えてくれます。今や麗澤大学の新しい出会いの場となつてはいるのではないでしようか。これもE-Loungeの大きな魅力の一つだと思います。

このような発見や、驚き、出会いは海外に留学に行つたときと少し似ているように思います。E-Loungeがオープンしてから半年ほど経ちますが、まだ利用したことのない学生がいると思います。初めは不安に感じる人が多いと思いますが、思い切って利用してみると新しい世界が開けると思います。ただCDを聞いたり、本を読んだりするだけでは身に

つける」との出来ない英会話のスキルももちろん身につけられるし、今もつてている自分のスキルをもつと伸ばすことが出来ると思います。麗澤大学の多くの学生がE-Loungeを利用して、英会話が上達する喜びや、自分の知らない世界を知る驚き、新しい友人を作る楽しみなどをみんなで共有していきたいです。これからもE-Loungeで私なりの「チ留学」を楽しんでいこうと思います。

〈E-Lounge〉について（編者注）

E-Loungeは外国語学部「国際共通語としての英語教育」（文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラムとして採択）の一環として、英語でコミュニケーションする環境の充実を目指して設置された。図書館三階にあり、毎日十一時半（月・水・金は午前十時）から利用可。E-Loungeコーディネーター、アメリカ出身のClyde Lewis先生、そして日本人スタッフが駐在している。



ゲスト(左から2人目)を囲んで難民問題について話し合う

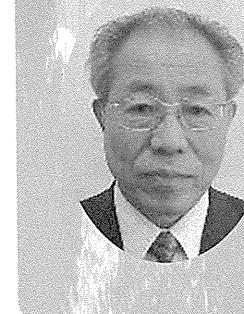


来学した米国レッドランズ大の学生も訪れた

キャンパスライフを支援する

—「学生相談センター」の役割と現状—

学生相談センター副センター長 森川正大



平成十八年度の組織変更により、学生部の一部門であつた学生相談室を母体として、学生相談センターが誕生した。学生相談センターは、国際交流セン

ターやキャリアセンター等と共に、学部学科等の教育指導組織とは異なる本学の横断的の学生生活支援体制の一部門である。

「学生相談センター規程」第二条には、設置目的が次のように書かれている。

「センターは、学生が当面する諸問題の相談に応じ、学生生活の充実と人間的成長を支援するとともに学生の心の健康及び修学支援の課題について研究することを目的とする。」

この稿では、本学の学生支援について理解を深めていただくため、学生相談センターの設置目的や役割について紹介し、次いで学生相談センターの活動内容、利用状況に触れ、最後に相談内容から見た今

時の学生の傾向に言及したい。

（一）学生のカウンセリングに関する事項

（二）子女に関する保証人のカウンセリングに関する事項

事項

(三) 学生指導、学生対応についての教職員支援及び

コンサルテーションに関する事項

(四) 学生の心の健康及び自己開発促進のための教

育・啓発に関する事項

(五) 危機状況にある学生対応及び学内外の関係機関

との連携に関する事項

(六) 学生相談に関わる研究、調査及び資料整備に関する事項

(七) カウンセラー及びアドバイザーの資質向上に関する事項

(八) その他、センターの目的を達成するために必要な事項

学生相談センターの活動は、この定めに基づき行われる。

学生のカウンセリングは、面接カウンセリングを原則としているが、病気や引きこもり状態で通学不可能な学生もあり、電話・手紙・メールによつてカウンセリングを行うこともある。カウンセリングのイメージには、ごく一部の特異な学生が利用するも

のとの誤解もあるが、本学の学生相談センターは、全学生を対象とした修学支援と全人的成長を目標として、「何でも相談」「よろず相談」をモットーとしている。もちろん全ての相談に対応できるとは限らないので、必要に応じて学内外の適切な機関を紹介している。

相談内容は、(一) 勉学・進路、(二) 心理・適応、(三) 生活・その他、に大きく分けているが、毎年、(二) の心理・適応が最も多い。希望者に対しては、自己理解のための心理検査の実施や、医療機関等の紹介を行うこともある。また、卒業生や退学者についても、在学中に相談センターを利用していた者については、一定期間は対応することにしている。

家族・保証人からの相談は、一人暮らし、寮生活、病気、不登校、対人関係、修学問題等、多岐にわたり最近では学生の問題を本人に代わつて相談する傾向が増加している。

さらに、学生指導、学生対応に関して教職員から相談を受けることも多くなつてている。個別の問題の

場合は助言や連携により最善の対応を検討し、全般的な事柄の場合は、学科会議や教職員研修会へ参加し助言的にかかわることになる。

青年期の発達課題の達成や学生の心理的適応について、教育・啓発活動を行うことも学生相談センターの重要な課題である。これには二つの形があり、第一はグループセミナー等の体験学習の場を提供することである。毎年二回、コミュニケーション・スキル向上のためのトレーニングや自他理解のためのグループ、ピアカウンセラーや養成セミナー等を実施している。また、学生課が主催する「リーダーセミナー」、国際交流センターが主催する「留学事前セミナー」、キャリアセンターの「学生アドバイザーリサーチ」等にカウンセラーが出向き要請に応えている。第二は、講演会等による教育啓蒙活動であり、現在、検討中である。

新入生に対する入学時調査として、「麗澤大学入学志向度調査」と「UPI（心身健康度スクリーニングテスト）」を実施している。調査目的は、特に緊張



相談センターの室内から

感や不安感が高いと見られる学生に対して指導助言し、あわせて在学中の学生相談センターの利用について周知すると共に、入学者の全般的傾向の変化を知ることにある。

学生相談センターのスタッフは、センター長、副センター長のほか、常勤カウンセラー二名（一名は副センター長の兼務）、兼任カウンセラー一名（学部教員の兼務）、非常勤カウンセラー一名、計四名のカウンセラーガが配置されている。カウンセラー二名は「臨床心理士」（財団法人臨床心理士資格認定協会認定）、二名は「大学カウンセラー」（日本学生相談学会認定）の資格を有している。なお、学生相談センターの運営のため、大学院研究科、学部、別科および学務部の代表からなる「学生相談センター運営委員会」が置かれ、基本の方策が審議され方向が示されている。

学生相談センターは、原則として、月曜日から金曜日の午前九時から午後五時半まで開室し、カウンセラーガが相談に応じている。また、カウンセラーの

相談活動を支えるために、学生課に相談センター担当職員が配置されている。

学生相談センターの場所は、二号棟二階である。事務室のほか、二つの面接室（兼待合室）から成っているが、中廊下を挟んで教室があるので、出入りに気を使う学生にとつては良い位置環境ではない。

さて、学生相談センターの利用状況であるが、平成十八年度は未集計なので、平成十七年度のデータで見ると、利用件数は二百八十九件、人数は六十九名（利用率二・四%）であった。日本学生相談学会の平成十五年度調査による、一千九五千人規模の大学の来談率三・二%に比べるとかなり低いことが分かる。本学学生の適応度が高いのだろうか、学内の他の支援体制を活用しているのだろうか、それとも潜在的ニーズに応えていないのだろうか。検討課題の一つである。

主訴別では、「勉学・進路」六十九件、「心理・適応」百九十五件、「生活・その他」二十五件である。具体的な内容として、「勉学・進路」に関しては、留年、

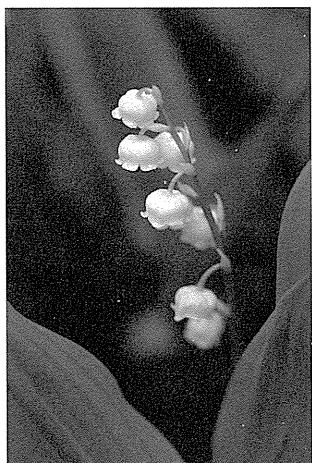
不登校、休退学、転部転科、授業への不満、将来への不安、など、「心理・適応」に関しては、人間関係、性格、ストレス、過去の体験、うつ、自傷、心身の病、など、「生活面・その他」に関しては、親子関係、家事、学費、バイト、架空請求、学生ローン、ハラスメント、などがあり多様である。

利用方法は、面接二百六十四件のほか、電話十三件、メール十二件である。利用回数は、平均では四・二回であるが、一回がもつとも多く三十一名（四四・九%）の一方で、二十一回以上の来談者も二名を数える。

大学は、十八歳人口の減少による全入時代を迎え、平成生まれの青年が入学する。家族の変化、高校までの学校教育の変化、社会の変化は、多様な青年を大学に送り込んで来る。大学にとつては、いまだかつて経験のない多様な質の学生に対応することが迫られる。学生相談センターを自主的に訪れる学生はまだ良いが、最近は自ら相談できず、父母が代わって相談を持ち込むケースも増えていく。大学は、多

様な学生支援体制を備える必要があるが、本学の学生相談センターはその一翼を担い、学生を迎える構えている。

カウンセラーは、相談に関して守秘義務を負っている。生命に危険が及ぶと判断される場合を除いて、相談に来たことや、相談内容を許可無く他に漏らすことは無いので、学生だけでなく、それぞれの立場で学生相談センターを活用していただくことをお願ひする次第である。

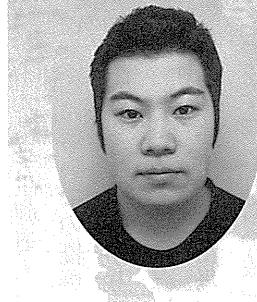


剣道部体制の見直し

剣道部主将（国際産業情報学科四年）

小川拓郎

Reidsi now



近年、麗澤大学の課外活動が衰退してきている中で、それを活性化するための突破口として剣道部が本学の指定強化部となつたことは大変喜ばしいことだと思います。私たちは剣道をする場を与えられ、共に成長していく仲間に、そして監督やコーチといった非常に恵まれた環境の中で活動を行っています。

これほど恵まれた部は本学でもなかなかありません。この恵まれた環境の中で剣道ができるに対し感謝しないといけません。私たち剣道部が活発な活動をしていき、こうした私たちの活動により、他の部活動、サークルや他の団体へのいい刺激となり、

本学の課外活動の活性化へと繋がるものになればいいと思います。これはとても重要なことであると同時に責任の重大さを感じるものもあります。

剣道部を他から目標とされる部にしていきたいと考える中で、今までの剣道部のままではいけないと私は思います。そのためまずは、部内における体制の立て直しと強化を図っていきたいと思います。やはり強化部として活動していくにあたり、欠かせない一つあります。体制の立て直しが充実した活動をしていき、こうした私たちの活動により、他の部活動、サークルや他の団体へのいい刺激となり、

役割をそれぞれがしっかりと認識し活動していかなければなりません。いくら役職をつくったとしても、

部員がそれを理解し、動かなければ意味がありません。人数が多くなってくると、やはり部をまとめるに組織的な行動をとらなくてはならないと思います。私たち剣道部でもそれらに対しまだ十分に対応しきれおりません。それぞれの役割を一から考え、立て直していく努力がもつと必要です。

体制の立て直しだけではなく、普段からの私たちの練習および活動自体も見直しが必要です。これまでの活動だけで満足してはいけません。今まで

以上の練習の量、質ともに、より高いものを求めて取り組んでいかなければなりません。その為には、今まで行つていなかつたようなことにも取り組んでいきたいと思います。例えば、強豪校へ遠征し、強い選手と稽古することによつて多くの刺激を受け、部員達の意識を高めることができます。また、国内の遠征だけではなく海外へも遠征し、稽古を通じて交流を深め、本学の知名度を海外に広める

ことも意義があると思います。

剣道部では今まで以上の成績を残そうと大きな目標を持つています。具体的には、千葉県学生剣道大会においては、個人、団体戦両部門においての優勝、そして関東学生剣道優勝大会では上位に勝ち上がり、今まで一度も成し遂げていない男子・女子の双方での全日本学生剣道優勝大会（インカレ）への出場、そして日本一を目指に掲げています。これらの成績を残すことにより、他の麗大学生団体が活性化する

きつかけになればと思っています。

課外活動面だけでなく私生活においても、私たち
は本学の学生の模範とならなくてはなりません。剣
道には、剣道修練の心構えというものがあり、「剣道
を正しく真剣に学び 心身を鍛磨して 旺盛なる気
力を養い 剣道の特性を通じて 礼節を尊び 信義
を重んじ 誠を尽くして 常に自己の修養に努め
以つて 国家社会を愛して 広く人類の平和繁栄に
寄与せんとするものである」とあるように、剣道の
徳目を通して、立派な人間になるよう努力しなけ
ればなりません。学内外においても挨拶、礼儀、立
派な姿勢態度を示していくかなければならないと思つ
ています。こうしたことを剣道部が率先して行つて
いくことにより、今後の麗澤大学の課外活動がより
活性化していくことを願つてやみません。

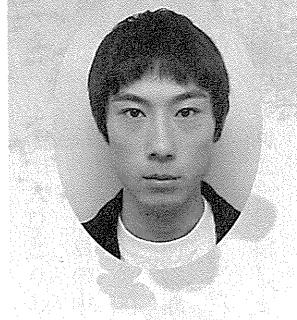


勢ぞろいした剣道部員

陸上競技を通じて学び得るもの

陸上競技部主将（国際産業情報学科三年）

清水 健



私たち陸上競技部は、平澤元章監督（外国语学部准教授）の指導のもと、陸上競技を通しての体育会活動に、充実した毎日を送っています。もちろんスポーツの世界は過酷で、努力をしても花が咲かないこともよくあり、その度に悩んで落ち込んだり悲しんだりもします。しかし、信頼し合える仲間と支えあい、励ましあい、時にはライバルとしてお互いを高めあって、苦しい練習を乗り越えて進んでいます。部員みんなの目標はひとつ、箱根駅伝出場です。この目標があるからこそ、私たちは毎日の練習を大切にして、部員一丸となつて今日まで努力してきました。

結果を出すにはそれだけのことをしなければなりません。ただ走る、ただやる。そんなことでは本当に強くなりません。練習を継続し、力を確実なものへと変えていくことが大切です。しかし、練習し続けている私たちはいつもケガと隣合わせです。練習後にはしっかりとケアが必要になり、その日の疲れはその日のうちにできる限りとることにより、次の練習でしっかりと走れるようになります。またそれに伴い健康管理をしっかりとし、石鹼での手洗い、うがいはもちろん、就寝時には濡れタオルをかけたりマスクをしたりして、寝ている時の乾燥を防ぎま

す。これによつてのどを乾燥させずに、のどからくる風邪を防ぐことができます。ちょっととした気の緩みや季節の変わり目が要注意です。体のどこかに痛みがあつたり、体調不良で気分がすぐれなかつたりすると、もちろんよい練習なんてできません。よい状態で練習に挑む。だからこそ日々の健康管理、治療が大切なことが十分理解できます。

しかし毎日、練習していると体の内部、内臓も疲れています。本当に疲れている時は、体の免疫力が落ちて、予防していくても風邪をひくことだつてあります。だからこそ私たちは一般の人よりも神経質に健康管理に取り組まなければなりません。面倒だの、やりたくないなどと甘いことは言つておれません。一人でもそのような状況だと部の士気が下がります。私たち陸上競技部の部員は全員がそんないい加減な考えなど持つてはいないと信じています。

そして何より「基本」が大切です。いろんな壁にぶちあたつても、いきつくところは「基本」です。大きなことや派手なことを考えて、自分を見失つて

はいけません。いかに自分と向き合うことができるか。それこそが物事に対する素直な態度と言えます。そしてそれを踏まえて、基本通りの行動ができた時に成功へとつながるのではないでしようか。これは平澤監督の考え方であり、部の考え方もあります。随分控えめな意見で、周りの人から見れば、おもしろみが感じられないかも知れませんが、競技を通して、いかに基本が大切かということは、部員全員がかみしめていると思います。

また私たちは「主体的、自発的に行動する」ということを念頭においています。誰だつて指示されたらそのように動けます。しかし私たちは社会人を目指した大学生です。いつまでも大人の言いなりでは進歩しません。学生自らが気づき、行動することが大切で非常に価値のあることだと思います。だからといって自分勝手に好きなように行動することが主体的ということではありません。現在の学生、子供はこの主体性を「自由」だと考えて好き勝手に行動していると言えるでしょう。最近ではマナーも守

らずに自分のことしか考えず、指摘を受けても反発する、「自由」ということすら履き違えている人を多くみかけます。平澤先生、わたしたちの考える「主体性」とはそんなものではありません。自らが与えられた環境の中で課題に取り組み、リーダーシップをとる。先の先まで考え、落ち度がないかお互いに確認し合い、無理、無駄、ムラがないか考えて実行することが、主体的に取り組むということだと思います。いずれにせよ常識の中で、与えられた環境の中で、ということが何より大切です。

しかしこんな生意気なことを言つてもなかなか思い通りにいかないのが現状です。部の話し合いでも「失敗したな、確認していれば…」と後悔することも多々あります。もちろん私自身もまだ理解、把握ができていないことでいっぱいです。しかしそのための大学、そのための先生だと思いますし、最初から理解できていっては大学の学びなど必要ありません。だからこそこの四年間で陸上競技を通して心身ともに磨き、自分自身を高めていくことが必要であり、

それこそが大学の価値であると思います。そしてこれが「体育会の学び」につながっていきます。

「体育会の学び」とは何でしようか?言葉だけは知つていても内容はよくわからないというのが現状です。普段、考えもしないようなことだと私は思いました。しかし私たちには、平澤先生のもとでこの「体育会の学び」についていつも深く考えさせられます。もちろん私たちでさえ体育会というものが何か十分に理解できずにいることも事実です。しかし、先生の熱い指導で、体育会の学びというものがだんだん理解できるようになりました。

社会で言うならば、例えばある会社で部長が人指し指を上げ、何か発言しようとした時、とっさに部長のもとに立ち寄り、「何かご用でしようか?」と聞きにうかがう。大学ならば、授業中に先生が教室を消灯して、スクリーンを使つた授業を行う時、窓際に座っている生徒が自発的にカーテンを閉める。あるいは先生が「少し熱いな」と言えば窓を開けたり、暖房を切つたりと、相手の立場になり、敬い、謙虚

に行動する。これを私たちはひとつ目の体育会の学びだと思っています。奴隸になれ！ということではありません。いつも広い目で周りを見て、目配り、気配りをするのは社会に出て必要不可欠なことだと思います。このようなことを現在の学生は何人できるでしょうか？

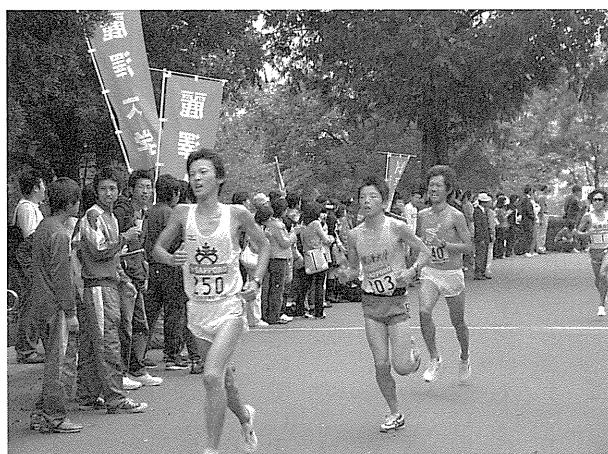
これは単なる例で、これだけではありません。あいさつをきちんとする。身だしなみを整える。上の人に敬い、常識をわきまえて：当たり前なことばかりですが、このことをどれだけの人が体得できているでしょうか？社会に出ることができずにうつになる人が増加しているのも、我慢ということができる現実逃避に走っているとしか思えません。私たちは与えられた環境の中で我慢し、その中で様々なことを理解し、感謝の気持ちを持つて取り組んでいます。もちろん私たちも人間ですから、時には途中で投げ出したくなることもありますが、私たちの活動がきっと社会に出て役立つことにつながると信じています。

「自分に厳しく人に優しく」、すでに聞き飽きた言葉となっているかもしれません、私はそのような言葉を基本として、大切にしていこうと考えています。そして私たちの活動がいつか世の中で認められることを信じています。

私たちはまだまだ未熟で、毎日が勉強です。大学関係者の方々にも迷惑をかけっぱなしで申し訳なく感じることも多々あります。しかし私たちはそのような方々に感謝の気持ちを強く抱いています。たくさんの人のご理解の中、私たちがこのような活動ができるなどを深く感謝しています。これからも私たちは努力を怠らずに陸上競技に携わり、応援してくださいと共有する夢の実現に向けて頑張ります。「麗澤大学」という大学名の入った轡たすきをかけて、箱根路を走る。こうした今のチームの最終目標を一日も早く達成できるよう、平澤監督の指導の下、これからも厳しい練習に皆で耐えて乗り越えていこうと思います。



箱根駅伝予選会出場へ勢ぞろいした陸上競技部員と応援団



力走する本学の選手(左から2番目)

指定強化部に選ばれて

英語劇グループ部長（中国語学科四年）

齊 藤 雄一



私たち英語劇グループは二〇〇六年で七十一年目を迎える歴史あるグループです。今回指定強化部に選ばれて大変うれしく思います。

私は毎年前期公演・麗陵祭公演・東京公演と年三回の公演を行つております。二〇〇六年も十一月十一日に東京在のある三百人劇場を借りて公演を行つてきました。今回の私たちの公演はシェイクスピア原作の「マクベス」でした。公演後には本当にたくさんのお褒めの言葉を頂き、公演は、無事成功に終わつたと感じております。

私たちは前期公演の制作期間は約一ヶ月、後期の

東京公演の制作期間は約二ヶ月、毎日放課後にスマートシアターで活動をしています。私たちの演技指導をしてくださるのは本学の准教授でもあるマーク・トリキアン先生です。ほかの部活動やサークルと比べると私たちの活動は過酷のように感じられるかもしれません、観客の方々に楽しんでいただくな劇を作り上げるには厳しい練習が必要となつてきます。もちろんただ厳しいだけのグループではありません。厳しい練習を乗り越え、本番を終えてカーテンコールで観客の方々からたくさんの拍手をいただいている瞬間、その瞬間にそれまでの苦労がすべ

て吹き飛ぶほどの達成感を味わえます。そして毎日活動していることもあります、部員同士の仲がとてもよくなります。劇制作期間中は本当に毎日顔を会わせるので、楽しい時も辛い時もともに過ごした大切な仲間となります。

私たちのグループは普段から英語を話す機会に恵まれています。劇はもちろん英語を使って行われますし、演技指導をトリキアン先生が行うときも英語です。そして週に一度か二度、練習後にトリキアン先生のお宅で行われるパーティーでも英語が使われます。このパーティーというのは、トリキアン先生のお宅で部員とトリキアン先生で何気ない日常のこととを話題に気楽に話したり、時には演技のことについて真剣に語り合つたりする場です。このように英語を使う機会が非常に増えるのが英語劇グループの特徴です。入部して半年も経つと、トリキアン先生と英語でコミュニケーションをとることができるように英語力を部員は身に付けています。

しかし初めからみんなが先生と英語でコミュニケーションをとれていたわけではありません。英語劇

グループに入つて先生が話す英語を聞き、自分の口で話すことによって、自信をつけ、徐々にしゃべることができるようになつたのです。もともと中学・高校と六年間英語を勉強してきた私たちには基礎知識というものはすでに備わっています。私たちが英語を話すときに足りないのは自信と単語力です。初めは間違つたらどうしようとか恥ずかしいとか考えなかなか言葉が出てきませんが、先輩方の助けを借りて話しているうちに徐々に自信がついてきて、自分ひとりで話すことができるようになつてきます。単語力は未だに十分とはいえず、私たちも日々勉強しています。先生と話をしている際に聞いたことのない単語や自分が言いたいのにわからない単語がいくつもでてきます。そのときには辞書を使って意味を理解し、実際に使ってみます。辞書で調べた単語を実際に耳で聞き、話すことによつて、本当に自分の頭の中に記憶されていき使える英語となつていきます。

もう一つの特徴としては、東京で劇場を借りて公演をするグループはなかなか他にはないと思います。学生という立場でありますから、東京の舞台に立ち英語で劇をする。この経験は他の何物にも代えることができない自信を自分に与えてくれます。大学に入

る前、卒業後を含め舞台に立つことなどなかなか味わえることではありません。厳しい練習を乗り越え、部員同士がまとまって一つの劇を作り上げていく。そして東京公演を成功させた時には、本当に今まで苦労してきた甲斐があつたと実感します。このような経験をぜひ他の学生にも体験してほしいと思いま

す。

なってしまいます。そこで今私たちは劇を作るのに最低限必要な機能だけを残し、活動の規模を縮小させる作業を行っております。この作業を行うのは非常に悲しいのですが、このグループを存続させていくには仕方のないことです。

英語劇グループを存続させていくために二〇〇六年私たちが取り組んだことがもう一つあります。それは劇制作にOBの人も参加してもらうということです。今回は英語劇グループの卒業生や麗澤大学の卒業生、教員の方々が参加してくださいました。OB・OGの方々の参加は私たちの大きな助けとなりました。またOBの方々はほとんどが社会人であり、その方たちからお仕事の話や大学時代の話を聞くことができ、大変有意義な機会となりました。

そして今回手伝ってくださったネイティブの教員の方との交流は、私たちを非常に新鮮な気持ちにさせてくれました。普段私たちはトリキアン先生と英語で話す機会をたくさん持っていますが、他のネイティブの方と話す機会というのはそれほど多くはあ

りません。やはり同じ人と何度も話していると、あいまいな表現でも伝わってしまうし、慣れが出てします。しかし今回、ネイティブの教員の方と話す機会が、私たちにもう一度きちんととした文法で、どう話せば伝わるかということを考えさせてくれました。部員が減っていく中、外部の方の協力をいただくのは仕方がないことであり、残念なことでもあります。ただ、来年からもぜひ部外の方々からご協力をいただきたいたいと思っています。

ここ数年、大学内で課外活動に参加する人が減っています。これはとても残念なことに思えてなりません。課外活動に参加することで得られることはたくさんあります。私たちのグループなら英語力、仲間、技術（大道具や衣装をつくるため）、自信を得られます。もちろん課外活動に参加することで自由に使える時間は減ります。しかし非常に貴重な経験が課外活動に参加することで得られるということを

ぜひ理解してほしいと思います。なかなか言葉で伝えることのできない抽象的なことばかりですが、私たちも伝える努力をして、来年はぜひたくさんの新入部員を迎えたいたいと思います。決して英語劇グループの伝統は消さないようにがんばっていこうと思っています。そして麗澤大学の学生以外の皆様のご参加もお待ちしております。



シェークスピア原作「マクベス」の公演から

課外活動に所属する意味

軽音楽部部長（国際経営学科四年）

長嶋佑佳



軽音楽部サニーゲイツとは、音楽好きの学生が集まり、ジャズビックバンドを楽しむ歴史ある部活です。数ある部活とサークルの中から強化部を選んでいただき、今回多くの卒業生に現状をお伝えできることを感謝いたします。

二〇〇六年度は例年に比べてイベントの多い年であり、また、メンバー一人ひとりが部活に所属する意味と、ライブの大切さを考えた一年であります。毎年恒例のライブとイベント参加に加え、今年は学内・学外を問わず様々な場所で演奏してきました。四月の入学式では、新入生の入学を祝つての演奏。

新歓パーティーでは新入部員獲得に必死でした。六月の「伝統の日」行事では、晴天で気持ちよく演奏。七月の七夕ライブでは新入生の初ステージ。昨年に引き続き行つた、ピアノサークルとダンスサークルとサニーゲイツ主催のチャリティーアイベント七夕祭。普段全く違う活動をしている団体がひとつつのテーマを決めて協力することはとても大変ですが、目的をもつて達成感を一緒に味わうことで多くの人と交流がもてました。八月には数年ぶりに「手賀沼ジャズフェスティバル」出場。レベルの高い参加者の中での演奏にメンバーも緊張していました。トップバッ

ターというプレッシャーもありましたが、自分たちらしい演奏ができました。

養護学校を卒業した子供たちの行き場確保を支援するめろんばんという団体が主催する「めろんばんお楽しみパーティー」での演奏。ジャズを聞き慣れないので子供たちを楽しませるにはどうしたらよいのか、普段のライブ以上にお客さんの反応を気にしました。しかし、私たちの心配とは裏腹に、子供たちと保護者の方は体を左右に動かし、手をたたくなどの反応をしてくれたのです。音楽を楽しんでもらうことは、自分たちが一番楽しめることなのだと感じることができた貴重な体験でした。九月には劇団サーカルの「華美」と共演。一回の公演に真剣に取り組む他団体の姿を身近で感じ取ることは、サニーゲイツにとつて良い影響になりました。十一月の麗陵祭。毎年そんなにやら音がするといった様子で足を止めてくれる

お客様が結構たくさんいました。私達を知らない人が寒い中、聴いてくれたことに、吹いているメンバーが自然に楽しんでいるのがわかりました。

伝統ある部活だからこそ守らなくてはいけないことがあるのかもしれません。部活だから必死に練習しなくてはいけないのかもしれません。しかし、今のサニーゲイツにいるメンバーは、そんなプレッシャーを重く感じることなく、個人個人が好きなだけ音楽を楽しんでいます。とても簡単なようですが、実はこう思えるようになるまでは必死でした。

部活という決められた環境でも、音楽が好きだからと続けてくれている部員を楽しませたいと思つていた私が、部長として一番気にしていたことは、部員のモチベーションの違いです。「自分は音楽が好きだ。良い演奏をしたい。もっと練習しなきゃ」。そんな気持ちは、音楽を好きになるほど強く感じていくことだと思います。こだわりや演奏に対するレベルに欲が出ると、他人にも強要したくなるものです。しかし、大学生なのですから、他にもやりたいこと、

やるべきことがあるので、「自分はそこまで頑張れない」と思う人がいることも当然です。そのモチベーションの差は、私がどうあがいてもなかなか統一できるものではありませんでした。

一人ひとりの部活に対する熱意や気持ちを統一するには、ライブを盛り上げて多くのお客様に来てもらうこと、部員を増やすことではないか等、皆で何度も話し合いました。しかし、それを実行しても思うようにはいかず、今となつてはビッグバンドをとともに演奏する人数さえいないというのが現状です。楽しいステージをたくさんすれば、部員も楽しんでもらえるのではないかと必死に多くのイベントをこなしました。しかし、ライブの数が多くれば多いほど練習はきつくなり、出欠も厳しくなります。そんな状態が少ない部員を更に苦しませてしまつたこともありました。

モチベーションの違いと人数不足に悩んでも、部活を続けてくれている部員がいる限り、私が楽しもうと感じたのは、「めろんぱんお楽しみパーティー」



部活の仲間たち

で演奏したときでした。正直、いろいろな制約がある部活を単純に楽しむのは難しかったのですが、私たちの演奏でお客さんが体を左右に揺らしてくれるのを見ただけで感激したのです。それまで全く知らなかつた人たちと交流できたのです。こんな気持ちを味わってしまうから、いくら練習が厳しくても続けてしまふのです。達成感と充実感は、一生懸命やればやるほど味えることも学びました。

私は部員みんなが常に一生懸命でなくともいいと思うようになりました。「瞬の楽しさを感じ、「サニーゲイツに入っていて良かった」、「部活に所属していく良かった」と思って次のステージを乗り越えてくれたら、それでいいと思いました。個人差はあるだろうけれど、それぞれが好きなだけ部活を楽しめたら、それでいいのです。

大学生活で、やりたいことはたくさんありますが、「やりきった」と自信をもつて言える部活に出合えたことが幸せです。

今回、軽音楽部サニーゲイツが強化部に選ばれた

ことはどう変わるのか全く想像がつきませんが、今まで通り、多くの場で演奏し、初めての人にも楽しんでもらえる音楽を目指していきたいと思います。学内・学外を問わず音楽で交流を持つことができるには、サニーゲイツの武器なのですから。また、強化部になつたことで、プレッシャーに負けることなく、好きなだけ音楽を楽しむ部活を目指します。私達の活動で、大学生活も部活で変わらぬだと感じてくれる学生が増えたらうれしいです。



日本語教師として成長する方法

シェフィールド大学講師

(平成十三年三月日本語学科卒業)

石綿由美子



私は幼いころから、将来は日本語教師の職に就きた
いと思っていたので、高校卒業後の進路として麗澤大
学外国語学部日本語学科への入学を選んだ。そこで四
年間、日本語教育を勉強し、卒業後は日本語教育学に
ついてさらに知識を深めたいと思つたため、同大学大
学院言語教育研究科日本語教育学専攻に進んだ。学部
時代の勉強とは大きく異なり、実践的な日本語教育の
側面について学ぶことができた。他の学生と議論した
り、勉強したことの情報を交換したりすることによつ
て、興味のある分野について知識を深めることができ
た。修士論文を執筆し、二〇〇三年に博士前期課程を

修了した。その年の夏、国際協力機構の青年海外協力
隊に入隊し、ルーマニアのバベシュ・ボヨイ大学で日
本語を教えた。二年間の任期を終え、二〇〇五年七月
に帰国したが、同年九月よりアイルランドのリムリッ
ク大学に赴任した。そこでは一年間日本語を教え、現
在は英国のシェフィールド大学東アジア学科に所属し
ている。

麗澤での学生時代を終え、日本語を教える職に就き
り、二〇〇六年で四年目である。この間、三ヶ所の日本語
コースに携わってきた。本稿ではその経験で何を学び、
大学で学ぶこととはどのようなものかを考えていきた

い。

ルーマニアでの日本語教師経験は、何もかもが新鮮であった。仕事として日本語を教えること、異文化での生活（しかも日本とはかけ離れたルーマニアでの生活）、ルーマニア語でのコミュニケーション、青年海外協力隊としてのボランティア活動など、すべてが新しかった。今思えば、異文化での生活やルーマニア語の学習は新鮮に思え、楽しむことができたと思う。しかし、ルーマニアの大学での日本語教育は日本のそれとは大きく異なっていたので、かなり困惑してしまった。なぜなら、大学で学んできたことは、日本語をどのように教えるか、日本語とはどのような言語かなど基礎的なことはもちろん、日本語教育学や第二言語教育学において何が議論されているかなどであった。どのような方法が効果的な方法か、どのようにして授業の質を高めるかなど活発に議論した。

ある。私は何が学生達にとつて良い日本語教育なのかが分からなくなってしまった。近年日本語教育研究では、実際に日本語が使われる場面を考慮した、コミュニケーション能力を高める教授法や、学生の学習目的や学習方法、動機付けなどを重視して日本語を教えることについて盛んに議論されている。私が置かれた日本語教育の環境は、それが必ずしも正しいとか必要とされているとはいえないものであった。当初はそれで困惑したが、しかしながら、最初は何よりもその機関でのやり方に適応し、与えられた仕事を全うできるよう努力した。

数ヶ月経ち、ある程度満足のいく授業ができるようになったことはもちろん、日本語教育学や第二言語教育学において何が議論されているかなどであった。どのような方法が効果的な方法か、どのようにして授業の質を高めるかなど活発に議論した。

しかし、実際ルーマニアでの日本語教育は、必ずしも近年議論されているような教授法で行われておらず、私が学んできた日本語教育とは幾分異なっていたので

活動を取り入れようという提案だ。つまり、教師が一方的に講義をする授業ではなく、学生自らが日本語を聞いたり、話したりして、練習を行う授業である。そのことについて、日本語コースの責任者と意見交換したり、他の機関の先生方と話したりすることによって、少しでもその機関の日本語教育の質を向上させたいと思つた。

しかし、ここで分かつたことがある。それは、自分がそれをコースの改善だと思っていたことが果たしてそうなのかなということだ。実は、私が躍起になつて取り入れたほうがいいと提案していたことは、必ずしも

その学生達に適していることではなかつた。いくら教師が授業の活動に日本語を話すことや書くこと、発表することなどを取り入れようとしても、彼らがそれを授業の練習の一つとして受け入れないというのである。会話能力を高めるために、学生同士で会話練習をさせたり、教師のコントロールのない、学生自身が表現したい日本語を使わせる活動をしたりしても、結局学生達にとつてみれば、授業ではなく「遊び」や「雑談」

の部類に入つてしまふこともあるという。学生達が持つ授業像というのは受身的で、教師の講義から知識を得る場であるというものであつた。タスクや問題が提示され、学生自身で考え、それを達成あるいは解決するというものではない。これは、その学生達が今まで受けてきた教育方針や教師の指導方法、学校環境など様々な背景が影響するものだと思う。私はそれを聞いたとき驚き、果たしてそれもいい教育なのかと疑問に思つたが、結局は私が導入したほうがいいと思っていた方法は、実のところ学生達にとつては完全にふさわしいものだとは言えなかつた。

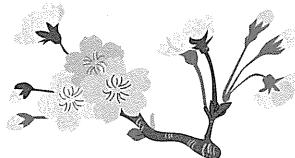
アイルランドの経験では、それとは全く違つた新しい経験をした。ルーマニアでは学生達の競争が激しく、たつた一つの日本留学のチャンスを得るために、全員が努力していた。学習進度についてこられない学生は自分で追いつくように努力しなければならない。しかし、アイルランドではそれとは異なり、各々の学生に丁寧に対応するという姿勢であつた。学生達の動機付けを常に維持することがひとつ目の目標であり、学習に

ついてこられない学生がいた場合、進度に追いつかせるために、どのような処置をとるべきかを考え、その処置を行っていた。当初は、以前の職場とのギャップに悩まされた時期もあったが、時間を経るごとにそのコースでの方針を理解してきた。どのような方針で、どのような目標で、日本語を教えるのかが徐々に分かつてきた。

このように、自分が持っている知識で正しいとか良いと思っていることや以前の職場ではよかれと思っていたことは、必ずしもどこでも当てはまるものではない。学生を取り巻いている教育環境や教育に関する考え方、コースが持つ方針は、各々独自のものである。

今振り返ると、麗澤大学では日本語教育に関する基礎的な知識を得ることができたと思う。それは日本語を教えるにあたって必要不可欠の部分である。現在実際に日本語教師という職について、それが大切な基礎であると改めて実感していると同時に、必ずしもその知識だけでは対応できないことがあるのも分かつてきた。その知識を基礎とした更なる対応力が必要であり、

それは直接学生と接することで分かつてくるものだ。学生がどのような授業を必要としているのか、学生や教師が持っている教育に対する考え方はどのようなものか、学生への対応の仕方やコースの方針など、実際にそのコースに携わってみないと見えてこない。大学で学ぶ基礎的な部分とは、これから学ぶことの大切な土台となるもので、その後、職場経験を通してさらにたくさん学ぶことがある。時に初心に戻って基礎を思い出したり、自分が正しいと思っていることを疑つてみたりすることが、日本語教師として成長する方法だと、私は思っている。



多様な顔を持つ魅力のベルリン

在外公館派遣員・ドイツ勤務

(平成十五年三月ドイツ語学科卒業)

見目涼子
けん もく
りょうこ



在ドイツ日本大使館で在外公館派遣員として勤務しはじめたのが二〇〇五年三月のことですから、かれこれ二年になろうとしています。在外公館派遣についてご存じない方も多いかと思いますので、ここで簡単にご紹介します。この制度は、一九七三年六月以来、外務省の委託を受けて国際交流サービス協会が実施運営しているもので、二〇〇六年七月一日現在、百八十一公館（大使館、総領事館、政府代表部等）に二百五十四名の派遣員が勤務しています。仕事の内容は後で詳しく書こうと思います。

今の私があるのは、何といっても麗澤大学でドイツ

語を学ぶことができたからです。そもそも、私がドイツという国と関係を持つようになったのは、中学二年生の頃です。それは一通の手紙から始まりました。学校で勉強した英語を使って文通をしたいと思い、文通相手の国として選んだのが、ドイツでした。一ヶ月に一通の文通を通して、相手や家族のこと、それにドイツの文化等を知ることができて、とても嬉しかったのを覚えています。大学での専攻を決めるべき時期に幸運にもドイツへ行く機会に恵まれ、手紙でしか知らない彼女と、その家族に会いました。英語が出来るのは彼女だけで、家族との会話はすべて彼女の通訳を通して書こうと思います。

今の私があるのは、何といっても麗澤大学でドイツ

てでした。その時、私は自分がドイツ語を話せるようになろうと決心したのです。麗澤を選んだのは、留学制度が整っているということ、少人数制教育という点に非常に魅かれたからです。

入学してほどないフレッシュマン・キャンプでは、先生方や多くの友人に出会い、親睦を深めることができました。先生方やそこでできた友人とは卒業した今も連絡を取り合っています。先輩がドイツ語を上手に操っているのを見て、自分もあんなふうにドイツ語が話せるようになりたいと思いました。一年生の終わりに友人と一緒にある大学のスピーチコンテストに登場し、そこで金賞を受賞したことが、ドイツ語の勉学の上で大きな自信につながりました。ドイツ語学科は教授陣と学生の距離が近いのが特徴で、質問や相談がとてもしやすい環境にあつたことはドイツ語をゼロから始めた私にとって、非常にプラスになりました。特に、ドイツ語学科は横つながりだけでなく、縦つながりもあり、先輩たちとも話をする機会を多く持てました。

麗澤には毎年数名のドイツ人留学生が日本語を学びに来ていますが、彼らからたくさんの生きたドイツ語を教えてもらいました。ドイツ人学生以外にもアジアからの多くの留学生が学ぶキャンパスで、私は彼らと授業の合間を縫つて日本語の会話練習の相手をしていました。私には台湾人と韓国人の会話練習パートナーがいましたが、同じアジア人でも考え方の相違点が少なくなく、毎回驚きと発見がありました。アジアの国々に私が大きな興味を持ち、より意識するようになつたのもこの大学のお陰だと思います。緑豊かなキャンパスで四季の移り変わりを肌で感じることができ、勉強に打ち込むには最高の環境でした。

私にとって学生時代にとても大きな意味をもつたのが、一年間の留学でした。初めて経験する一人暮らし。ドイツの生活すべてが新鮮で、ホームシックにかかる暇もなく、あつという間に一年が過ぎていきました。価値観の違いを痛感することが多く、自分と同年齢の若者でも大人としての意見をしつかり持っていることに驚き、また人との心温まる数多くの出会いがありました。

これらの経験は私にとつてかけがえのない宝物です。

大学卒業後、興味のあつた日本語教師の世界に足を踏み入れました。約一年間の仕事を通して多くの学生と出会い、日本語の奥深さに触れ、日本について伝えられる楽しさを感じることのできる時間でした。しかし、

いつかドイツ語を使ってドイツで仕事をしたいという気持ちがありました。在外公館派遣員制度のことは学生時代から知っていましたが、受験しようと思ったのは友人が派遣員になつたのがきっかけでした。国際会議や要人訪問の支援をしていると聞き、自分もしてみたいと強く思うようになりました。試験の結果、運良くベルリン行きの切符を手にすることことができました。

派遣員の仕事は多岐にわたります。上記のとおり、国際会議や、要人・出張者訪問の際の支援（これらはまとめて便宜供与といいます）をはじめ、館務補佐があります。便宜供与では、空港送迎や用務先への車の手配、レストランやホテルの予約、視察コースの下見等が挙げられます。便宜供与とはいえ、派遣員の仕事の大半は館内業務の補佐です。具体的には、書類や案

内資料等の作成、大使館宛郵便物の仕分け、館員離着任時の支援、館内の各種とりまとめ業務、ホテル、レストラン、観光地等についての情報収集などです。要人が来る際は外出が多くなりますが、普段はデスクワークが中心です。

仕事を始めて思ったのは、大使館の中は日本であるということです。つまり、日本語を使う割合のほうが圧倒的に多いのです。それでも、ドイツ人の現地職員や外部の人と話す時はドイツ語ですから、大学で学んだことは大いに役立っています。とはいえ、外国人として働くことにはハンディがあります。まだまだドイツ語の力が乏しい私は、思い違いをすることがよくあります。そのようなことを極力避けるためにも、相手の話にしつかり耳を傾けるように努力しています。自分の意見をはつきりと述べるドイツ人と一緒に仕事をするようになつて、こちらの意向も聞いてもらうために、今までの自分であれば引いてしまうような状況でも、粘り強く交渉できるようになりました。

ホテルやレストランの情報収集も業務の一つと書き

ましたが、私は実際に足を運ぶよう心がけています。ホテルでは大使館担当者とじかに話をしながらホテルの見学をさせてもらいます。要人が来る際にはホテルとの連携が重要になつてくるため、普段からいい人間関係を築いておくことが大切なことです。このように、仕事を通じて多くの人に会うことができたことを大変嬉しく思います。

要人が来る際は綿密な準備をしなければなりませんが、状況がその都度めまぐるしく変わります。例えば、車の手配が済んだと思つたら、急に全て変更になることも珍しくありません。そのようなわけで、派遣員には臨機応変に対応することが求められます。すべてが予定どおりに進み、最後に空港で一行の見送りを終えた時は、達成感を味わいます。これまでテレビや新聞などでしか見ることのなかつた要人訪問の舞台裏に関わったことは、自分にとつて貴重な経験です。ちなみに、昨年の十月には麗澤大学名誉教授の河野稠果先生がベルリンに出張され、私が空港送迎等の担当になるという、ちょっとした偶然もありました。

ところで、こちらで仕事をするようになつて、仕事に対するドイツ人と日本人の考え方の違いを感じることができます。眞面目に働くという点では同じだと思います。ただ、ドイツ人は自分や家族を犠牲にしてまで仕事をしたりはしません。過度な残業はせず（これは職種にもよると思いますが）、定時に帰宅し、家族との時間を大切にしています。それにしても、休暇の一周年から計画を立てている人には驚かされました。休暇取得が労働者の権利であるドイツでは、三週間まとめて休暇をとることは珍しくありませんし、職場の人もそれを当たり前のこととして受け入れます。例えば、担当者が休暇に入つてしまつと、「今彼女は休暇でいながら来週また電話して」と言われることもよくあります。休暇でたっぷり英気を養い、それが休息明けにいい仕事をするためのエネルギーとなつていい気がします。これは、ドイツ人全般に言えることで、しうが、常に心にゆとりを持って生活をしているようと思われます。自然の多いベルリンの街中を家族連れで散歩しているのをよく見かけます。このゆとりある

生活がとても羨ましく感じられることがよくあります。

私の住んでいるベルリンは旧東西ドイツの歴史を感じさせてくれる街であります。ドイツを分断していた長い壁がかつてどこにあつたかは、道路に埋め込まれているレンガを見れば分かります。市内にあるベルリンの壁博物館には壁をめぐるさまざまなドラマが紹介されています。統一後十六年が経ちましたが、依然として東西ドイツ人の「心の壁」は消えていません。それは、大使館の中でも見ることができます。この問題は簡単に解決できることではなく、またこのままでつと続いていくようにも思われます。

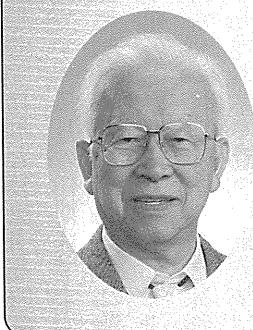
しかし、暗いことばかりではありません。統一後、ベルリンには多くの新しい建物が建設され、その発展には目を見張るものがあります。街の至るところで今なお建設工事が続いています。新しいものを創りながらも、古いものも大切にするドイツ人。歴史ある文化施設なども多く、オペラやコンサートも日本よりはるかに安いチケットで楽しむことができます。職場の近くにはベルリン・ファイルのコンサートホールがあり、

時々足を運んでいます。若者文化の発信地であるエネルギー溢れるベルリン。そんな街の中にも、自然があります。多様な顔を持つ街、それがベルリンです。私はここで仕事ができることに喜びを感じています。仕事だけではなく、プライベートでも充実した毎日を過ごしています。こちらに来てジョギングを始めましたが、少し欲が出て昨年九月には同僚とベルリン・フルマラソンに出場しました。自然の中を走りたいと、思わせてくれるのもベルリンの魅力の一つかかもしれません。

二〇〇六年はサッカーのワールドカップが開催され、大いに盛り上りました。二〇〇七年の夏にはここドイツでサミットが開催され、前半の半年はEU議長国でもあります。それに関連して、日本も参加する国際会議が多く開催される予定です。三月の任期終了まであと僅かな時間しかありませんが、少しでも多くの事を学びたいと思います。今後の計画は未定ですが、ここで得た経験を少しでも活かせる仕事に就きたいものです。麗澤の学生の皆さんも、大学で培った語学力を活かし、世界で活躍していただければと願っています。

校門から宮門へ

麗澤大学 名誉教授 池田裕



東亜専門学校創立に当たっては難しいものがあった。

というのは、当時（昭和十代後半）の国策としては、理工系大学並びに専門学校での教育に重点をおこうとしていた。ということは文系の専門学校の新設には冷たかったと言えよう。さらには、文系の高等教育機関には冷たい視線を注いでいた当局は、理工系の学校に対するは好意と善意を持って対応していた。そこで本

來文系であるはずの大学が理系の学科を創つたりもしている。例えば立教大学にも理科専門学校が並新設されたりし、関西学院大学では理工専門部を増設していた。いずれも戦後、廃校、廢部となっている。

そういう状況の時に創られた文系の東亜専門学校である。しかも校長廣池千英先生は、「外の学校はいざ知らず、わが校では、英語の授業をしっかりとやる。軍事教練はやらん」と断言しておられた。

したがつて当局の覚えがよくなかったのは、当然のことであった。その中をやつとくぐりぬけて創設した東亜専門学校であつた。

しかし、軍部の圧力、世相の冷視をよそに学校は、日を追うとともに充実した教育を実践していくた。そういう戦雲のもとにわが東亜専門学校の生徒達はどうな学校生活を送っていたのであろうか。その一端

を紹介しよう。

まず校長廣池千英先生の講義はどんなものであったか。それを聴いた樋口幸夫さん（麗澤会六期生、元廣池学園経理部長、麗澤大学講師）は次のような回想を記しておられる。

「毎週土曜日の午前中に一時間あった。これは徹底した気迫のこもった講義であった。先生は『眠かったら寝てもいい』と言われたけれども、眠れるようなものではなかつた。

ところが、今考えてみると先生が何を話されたのか一つも覚えていない。ただ先生の『これから先は、私一人になつても学生を一人でもいいから育てていかなければならんのだ』というあのすごい感覚的な気迫は徹底的に私にしみこんできた。先生のお蔭で、私がモラロジーを研究し、実践しなければいけないと覺悟のポーズは決まつた。このようにして、若い人間の気持ちというものが、校長先生のところにキューッと集まつていつた。」（出典）

また、外の先生方の講義についても次のように述懐

しておられる。

「父親から『お前はモラロジーに興味が少しあるらしいけれども、学園に行くと、いい先生からいい講義が聞けるぞ。語学では、宗武志先生（伯爵）という英語の大家がおられる。モラロジーでは創始者廣池千九郎博士の直弟子、中田中先生ほかいろいろな先生がおられて、それぞれ素晴らしい講義をしてもらえるのだ』と勧められ、これから勉学への期待と東京に近いところにあるので三十分でいけるということもあつて、『これは遊べる』という気持半分で勇んでやつて來た。ところが来てみると、聞いていたのとはちがつて、宗先生や中田先生、その他父から聞いていた諸先生は全部いなかつた。けれども学校の授業は開始された。」（出典）

この樋口幸夫さんは、九州は長崎のご出身である。当時、長崎から東京へ來るのには、煙を吹く汽車の急行に乗つても三十数時間かかつた。時間的にみると現在アメリカへ行くよりも大変なことであつた。

翌昭和十八年度入学の横山良吉さん（麗澤会七期、

元麗澤大学図書館副館長）は入学当初の学生生活を次のように紹介しておられる。

「上野から汽車に乗ると車窓に田園が続く。田舎びた北小金駅に下車。こんな辺びな所に専門学校があるのか？」といぶかしく思いながら、長い長い水戸街道を歩く。同じ汽車から降りた黒や国防色の服の中学生の群れが三々五々と前後しながら歩いている。中には高下駄をカラソコロンとひきずりながら、日本手拭いの汚れたのを腰に長くたらし、古ぼけた帽子をあみだにかぶつた浪人風の人もいて、最年少の私は驚いた。初めての土地なので道程がだいぶ遠いようと思えた。（中略）キャンバスに入ったところ屏ひとつ無く、ぼうようとした感じで、どこからどこまでが学校なかつかみどころがないように感じた。東亜専門学校は支那科、南洋科で二〇〇名募集し、このとき四七一名が受験した。大講堂（現廣池千九郎記念講堂）で入学試験が行われた。口頭試験は教室で行われ、試験官の山本恒次先生から「八絃一宇」や「忠孝一致」の意味について質問されたように思う。

合格した、支那科一〇二名、南洋科一〇二名は桜の咲き誇る四月に榮えある入学をした。この遠来の新入生を迎えてくれたのは美しく静かな学園の風景と温かい先生方や上級生たちであつた。この人たちが出会うたびごとにみんな丁寧に挨拶をされ、それが心からにじみ出た自然な感じで私たちを迎えてくれた」（出典）以上お二人の先輩の入学当時の回想を紹介して、いかに東亜専門学校の創立当初のスタートがスムーズにいったかを御披露させてもらつた。

ところが「好事魔多し」と言わんか、わが日本の国運が傾き始め、そのあたりを食らつて静かで温かくあるべき学園にも、カーキ色のしめつけと軍靴の響きがじわじわとしのびよつて來た。

その結果、昭和十八年十月に「学徒動員令」が下るに至つた。即ちそれまでは徵兵適齢にある学生でも在学中であれば兵役を延期してもらえる特権があつたが、その廃止に至つたのである。この「令」発布によつて東亜専門学校生徒の一〇〇余名が校門を去り、營門へと出征して行つた。これを「学徒出陣」と称した。そ

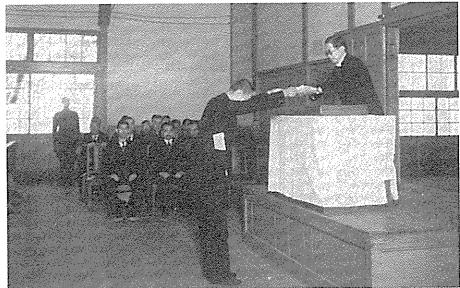
の式が昭和十八年十月二十一日、冷たいドシャブリの雨の中を明治神宮外苑競技場でとり行われ、戦場に赴く学徒たちが分列行進をした。その学生数約二五〇〇〇余名。その中にわが東亜専門学校の生徒一〇〇余名が参加している。胸に小さい日の丸をつけて「東亜」の校旗を掲げて、堂々と時の総理・陸軍大将東条英機の前を行進したのであつた。その中の大勢の方々が戦死されたのであつた。産声をあげたばかりの東亜専門学校にとつては、まことにつらい思い出になつてゐる。

校長廣池千英先生は、言論統制の厳しい中をかいくぐるようにして、生徒たちに「命を大切にせよ」と諭されたとのことである。今なら当たり前のことだけれども、当時は「滅私奉公」とか「七生報國」とかいうスローガンがまかり通り、「お国の為に命を捧げ、靖国神社で会おう」と言い交わすことになつていた。もし校長が「自分の命を大切に」などと言おうものなら、たちまち官憲に捕らえられ、ひどい処分を受けることまちがいなかつた。

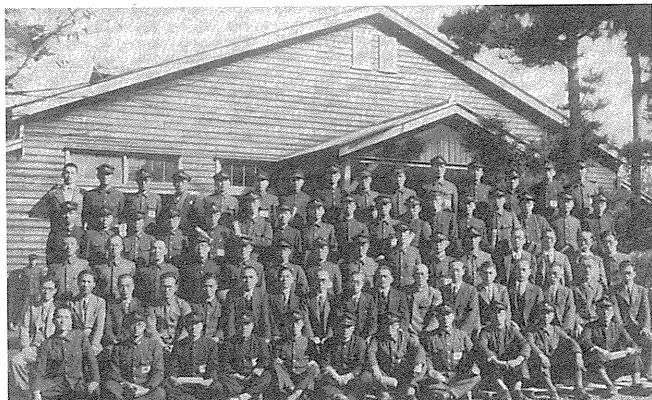
このように昭和十八年末から国を挙げて臨戦態勢に

突入していくにもかかわらず、日本軍の戦果はあがるどころか、撤退に撤退を重ねていく状態であった。そのあがく大勢の尊い人命を捧げたうえで終戦へと流れ行つたのである。

昭和二十年八月十五日の終戦によつて日本中が平和主義へ、民主主義へ、自由主義へと、百八十度の方向変換の舵をとることになつたのである。それでわが東亜専門学校はどのように生まれ変わつていつたであろうか。（次号に続く）



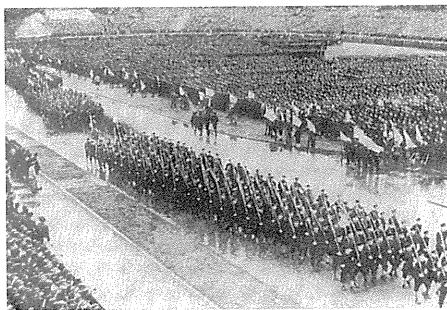
継り上げ卒業式で仮卒業証書を授与する廣池千英校長（昭和十八年十一月十五日）。



継り上げ卒業式をした生徒の記念写真。



廣池校長一家（専門学校二年生の子息・千太郎の学徒出陣記念、昭和十八年十一月）。



昭和18年10月21日・明治神宮外苑競技場（現在の国立競技場）で行われた「出陣学徒壮行会」。ドシャ降りの中で。

編集後記

◆本号は「専門ゼミナール」を特集しました。専門ゼミの活動を通して、個性溢れる教員と出会い、充実した学生生活を送る学生の姿を紹介することができました。それは本学の教育の特色を最も端的に示すものであり、ゼミ生の指導に専念される教員の姿に対して心より敬服いたしました。

◆また巻頭に、二〇〇六年度で退かれた梅田博之前学長の豊かな学識と経験に裏付けられた学生への提言を収めることができましたことは、本誌の格調を一層高めるものとなりました。さらに「麗大の今」のコーナーにおいて麗澤大学の目下展開している教育の内容とその成果を具体的に紹介することができました。さらに、「卒業生の今」のコーナーでは、卒業生の活躍を知ることによって、われわれ教職員にとっては教育の成果を確信することができ、在校生にとつては自分の進路を考えるうえで重要な情報を提供することとなりました。特に卒業生を推薦して下さり、彼らへの原稿の依頼もお引き受けくださった先生方には心よりお礼申し上げます。おかげさまで今回も多彩な内容の『麗澤教育』を編集することができました。これらはすべて、ご執筆くださった方々の協力の賜物であり、ご協力くださった先生方・学生諸君に対して心より感謝申し上げます。

◆なお二〇〇六年度より「麗澤教育編集委員会」と「紀要編集委員会」が統合され、新たな委員長のもと「麗澤大学出版委員会」として発足しました。本誌内につきましてご感想・ご意見・ご提言などがございましたならば、麗澤大学広報室までお寄せください。

『麗澤教育』第十三号

二〇〇七年四月一日

編集出版委員会

発行 麗澤大学

〒二七七一八六八六

千葉県柏市光ヶ丘二一一一

電話 〇四一七一七三一三〇三〇

印刷所 株式会社毎日新聞東京センター

表紙 株式会社エヌ・ワイ・ピー

出版委員会委員長
委員（外国语学部）
委員（国際経済学部）
事務局

井出 元

淡島成高、杉浦滋子、鈴木克則、鈴木康之
竹内啓二、豊嶋建広、花枝美恵子、保坂俊司
前田昌義、鷺津泰邦、鈴木敦子、三浦有二、

鳥淵貞幸、小林友紀子